

真田フォーラム 2010



8.19 (木) 13:30~16:30
長野市トイーゴ学習センター
シンポジウム

大名俳諧と真田幸弘の俳諧

講演・パネルディスカッション

井上敏幸 (佐賀大学)

西田耕三 (近畿大学)

小幡 伍 (真田連句を読む会)

平林香織 (長野県短期大学)

玉城 司 (清泉女学院大学)

8.20 (金) 10:00~11:30
松代町公民館

講演会

真田家伝来の典籍

講演 原田和彦 (長野市立博物館)

8.21 (土) 10:00~12:00
集合 : 真田宝物館前駐車場

松代散策 長国寺など幸弘公ゆかりの地探訪

江戸時代「武の真田」として天下に名を馳せた真田家ですが、
第六代藩主幸弘の時代には盛んに文芸活動を展開しました。
真田フォーラム 2010 では、「文の真田」の実態に迫ります。

現在、長野市松代町の真田宝物館（松代藩文化施設）には、松代藩主真田家を中心とした、江戸時代の武具や道具・衣装類のほか、大量の古文書や文芸資料が所蔵されています。それらから、大名たちが、武芸ばかりか文芸を嗜んでいた事実が浮かび上がってきます。とりわけ、同時代の大名や家臣と和歌の贈答や俳諧連句に一座して交流した松代藩第六代藩主真田幸弘の文芸活動に注目させられます。

この度、その真田幸弘の俳諧活動に焦点をあてて、同時代の大名で俳諧を楽しんだ大和郡山藩二代藩主柳沢信鴻、出羽鶴岡藩七代藩主酒井忠徳、熊本藩六代藩主細川重賢などとの比較を通じて、真田幸弘の俳諧の特徴について知り、「文の真田」の位相を明確にし、今後の研究の方向性と方策を検討します。また、真田家に伝来している典籍・文芸資料の特色についてうかがいます。さらに、幸弘以降幸貫や佐久間象山を生んだ松代の風土を知るために実地踏査を致します。

真田フォーラム 2010

参加無料
部分参加も可能です

後援 : 長野県教育委員会 長野市教育委員会

問合せ先 : 清泉女学院大学 総務課 Tel 026-295-5665

本研究「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」は、平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））の補助を受けて実施します。

プログラム

真田フォーラム2010「真田幸弘公の俳諧活動」

参加無料

8月19日（木） 13：30～16：30

会場：長野市生涯学習センター（トイゴ）

司会：平林 香織

1) 13：30～14：00

フォーラム開催の趣旨と真田幸弘公

玉城 司

2) 14：00～14：10

真田連句を読む会の趣旨と活動内容

小幡 伍

3) 14：10～14：50

細川重賢の俳諧

西田 耕三

（休憩 10分）

4) 15：00～15：40

真田幸弘と島原松平家

井上 敏幸

5) 15：40～16：30

シンポジウム「大名俳諧と真田幸弘の俳諧」

井上・西田・小幡・玉城

6) 18：00～20：00

懇親会（於 ホテル信濃路）

8月20日（金） 10：00～11：30

会場：松代公民館

司会：降幡 浩樹

講演：真田文書について

講師：原田 和彦

午後：真田俳諧資料見学調査（関係者のみ）

8月21日（土） 9：30～11：30

松代 長国寺（幸弘公菩提寺）等見学

後援：長野県教育委員会 長野市教育委員会

協力：清泉女学院大学 長野県短期大学

*本フォーラムは、独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（「真田文書アーカイブの構築及び松代藩六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」）を得て実施します。

2010真田フォーラム

私たちは、各地の研究者と大学院生、また長野県内の大学生や多数の長野市民の参加を得て、真田宝物館・長野市立博物館・清泉女学院大学・真田連句を読む会の協力をいただき、平成22年8月19日（木）・20日（金）・21日（土）の3日間、真田フォーラム2010を開催した。本冊子はそのうちの8月19日の記録である。

（趣意）江戸時代「武の真田」として天下に名を馳せた真田家だが、第六代藩主幸弘の時代には盛んに文芸活動を展開した。フォーラムを通じて「文の真田」の実態に迫る。

（概要）現在、長野市松代町の真田宝物館（松代藩文化施設）には、松代藩主真田家を中心とした、江戸時代の武具や道具・衣装類のほか、大量の古文書や文藝資料が所蔵されている。それらから、大名たちが、武芸ばかりか文芸を嗜んでいた事実が浮かび上り、とりわけ、同時代の大名や家臣と和歌の贈答や俳諧連句に一座して交流した松代藩六代藩主真田幸弘の文藝活動に瞠目させられる。

本フォーラムでは、真田幸弘の俳諧活動に焦点をあて、同時代の大名で俳諧を楽しんだ大和郡山藩二代藩主柳沢信鴻、熊本藩六代藩主細川重賢などとの比較を通じて、真田幸弘の俳諧の特徴を知り、「文の真田」の位相を明確にし、今後の研究の方向性と方策を検討した。また、真田家に伝来している典籍・文藝資料の特色についてのお話を長野市立博物館学芸員の原田和彦氏にお聞きした。最終日は、幸弘以降幸貫や佐久間象山を生んだ松代の風土を知るために実地踏査をした。

（日程・場所・内容）

○8.19（木）13：30～16：30 於長野市トイゴ学習センター

講演とディスカッション「大名俳諧と真田幸弘の俳諧」

井上敏幸（佐賀大学）・西田耕三（近畿大学）

小幡 伍（真田連句を読む会）・平林香織（長野県短期大学）

玉城 司（清泉女学院大学）

○8.20（金）10：00～11：30 於松代町公民館 於講演会

講演「真田家伝来の典籍」

原田和彦（長野市立博物館）

○8.21（土）10：00～12：00集合：真田宝物館前

松代散策 長国寺など幸弘公ゆかりの地探訪

司会 平林香織

2010真田フォーラム「大名俳諧と真田幸弘の俳諧」を開催したいと思います。

本日は大変お暑い長野市へ、遠方から、九州、北海道から研究者の方々、そして、長野市内の方、一般の方も学生さんもお見えです。長野はいつもびんずるの頃になりますと風の音に驚くような、ちょっと涼風が…というふうなのですが、今年は大変な酷暑、激暑が続いておりまして、今日も車の温度計は36度を指しておりました。お暑い中、またお忙しい中、このフォーラムのために皆さん集っていただき、本当にありがとうございました。

このフォーラムは科学研究費を文部科学省より頂きまして、先に本日佐賀からお見えの井上先生、西田先生たちが平成17年から19年までの研究活動を引き継ぐかたちで、本日この会を主催します清泉女学院大学の玉城司先生が研究責任者となって、新たにその全調査で明らかになったデータを、もう一度丁寧に読み直そうということで始まったもので、本日は、その立ち上げの集まりです。付言しま

すと、基盤研究C「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」(課題研究番号22520252)が正式名称です。

連句あるいは点取俳諧と言ったら良いのでしょうか、言葉と言葉を繋いでいく文芸活動を、江戸のお殿様がどんなふうに行っていたかということに注目しまして、清泉女学院大学、そして私の所属しております長野県短期大学、あるいは、松代にあります真田宝物館の学芸員の皆様、また、玉城先生が中心となりまして、松代ではこのお殿様の「連句を読む会」というのを去年から行っています。ここでは、コツコツと連句好きというか、古文書好きの皆様たちと繋がりながら、文化、お金にもならないですし、権力や権利とも全然結びつかない、けれども人と人とが繋がっていく、そして、言葉と言葉を繋げていく、そういう文化活動に焦点を当てているわけです。今回は地味ではありますがけれども「武の真田」として知られていた真田家の文芸活動に光を当てようということで企画しました。

今日は長時間にわたりますけれども、どうぞ皆様「文の真田」の一端に触れて頂ければと存じます。

私、司会を務めさせていただきます、長野県短期大学の平林と申します。よろしくお願いたします。

それでは、はじめに、清泉女学院大学の玉城司先生にこの「幸弘公の俳諧活動」、またフォーラムの趣旨といったことについて簡単にご紹介頂きたいと思っております。先生よろしくお願いたします。

00:03:37

玉城

時間の関係で、簡単にお話しさせていただきます。今日は、今、平林さんの方からお話ありましたように、お忙しい中、猛暑というか、酷暑の中、ありがとうございます。8月19日は「俳句の日」というそうです。うちの職員で今回も協力して下さる牧野さんが教えてくれました。〈中断〉今、出て来てくれたのは僕の教え子、清泉女学院大学の卒業生で、「愛テレビながの」というテレビ信州関連のインターネットテレビ局でレポーターをしている越美奈子です。かわいい教え子です。よろしくお願いたします〈会場 笑い〉。

さて、最初に、真田幸弘ってどういう人だったのかを簡単にお話させていただいてから、このフォーラムを開催します趣旨をお話させていただきます。

私たちは今、真田宝物館の方に大変お世話になりながら研究をしています。資料が大変良く保存されておりまして、おそらく大名の俳諧資料として全国一じゃないかと思っております。きちんと保存されている。こうして伝えられたことを、長野市、そして真田家に感謝します。ですから、これをきちんと読み、次の代に伝えていくということが私たちにとって必要なことだと考えております。

もうひとつは、九州の細川重賢さん、華裏雨(かりう)という俳号を持っていらっしゃるのですが、けれども、その方との比較、それから島原の松平家、升来さんとの比較を通じて、大名俳諧の中での真田の位置付けというのをきちんとしていきたいと願っています。

さて、肝心の幸弘公ってどんな人か、信州の方は良くご存知だと思いますが、あらあらふりかえります。幸弘公は江戸中期の元文五年(1740)の1月21日にお生まれになり、早くも13歳で家督を継ぎました。『日暮硯』に記されている大変有名な話があります。

お殿様—幸弘公は、自分の家臣に鳥かごを作らせて「お前、そこで何日間か過ごしてみなさい」「タバコも食べ物も自由にあげるよ」との仰せ。家臣は何の事か訳が分からずに、大きな鳥かごを作って、何日かは快適に過ごしました。ところが、一向に籠から出してくれない。とうとう家臣は「もう勘弁してください」音を上げました。

この話は、松代でも流行した飼い鳥の風習を改めようとして、家臣に身を以て教えたのだということになっています。こうした名君が、恩田杵を登用し、儉約による財政改革を行ったという話ばかりが先行して、実際に幸弘さんという方はどういうことをなさった方だったのかということほとんど

知られておりません。

今日は、先程司会の平林さんからもお話がありましたけれども、武の真田のイメージだけじゃなく、文の真田のイメージがあるんだというお話をしていくことになるだろうと思います。実際、真田宝物館には、幸弘公の多くの文芸資料が残されています

00:09:54

まず、武の真田といえば、なんと言っても有名な真田幸村からお話しします。資料をご覧ください。真田幸村は講談等で有名になった名前ですが、本来の名は信繁でした。今では、信繁というより幸村の名が通用していますが、この幸村こそ武の真田の代表者です。1600年、関ヶ原の戦いで、昌幸、幸村父子は西軍に付きましたが、敗れて、紀伊の九度山へ流されました。与謝蕪村という俳人が「隠れ住んで花に真田が謡かな」（真蹟短冊）という句を詠んでいます。九度山に流されたあと昌幸は亡くなってしまいます。幸村だけが息子の太輔と共に、九度山を出て、大阪へ行って豊臣方に付く。そこで、大阪の出城、真田丸を作って徳川勢力に対抗したという有名な話があって、武の真田のイメージが定着します。現代でも幸村の戦略や知恵を尊ぶ、真田の武のイメージは、ここから出ないのではないか、と思います。

亡んだ幸村に対して、徳川方についた真田家もあります。「六文を二つに分ける真田かな」という川柳があります。この出典を探しています。どなたか、ご存知でしょうか、教えていただきたいのですが、ともあれ、この川柳は、上田藩城主の真田昌幸は、信繁（幸村）と信幸（のぶゆき）の二人を敵と味方、徳川方の東軍と豊臣方の西軍に分けて、お家の存続をはかったという意味です。徳川方に付いたのが信幸です。信幸は幸福の「幸」を「之」に変えて沼田藩主、それから初代の松代藩主と変わってゆきます。生き残るのも知恵です。

00:14:17

生き延びたお陰で、松代藩で次の代を育てていった。その六代藩主が幸弘公です。私たちが今日考えたいのは、そういう武功を立て智略があったけれど滅びてしまった真田家ではなく、生き延びて文芸大名に変わっていった松代藩の六代目の藩主幸弘です。この代文芸活動が一番盛んだったと思われる。なぜ、そう言えるのかというと、残っている資料からです。3点だけピックアップして申し上げます。松代および長野市には、幸弘さんが書いた扁額が寺社にたくさん残されています。これらをまとめて真田宝物館で『城下町松代』というタイトルの図録を作ってください、幸弘公が書いた扁額をたくさん載せていただいています。書家としても、注目すべきかと思われます。

幸弘もっとも執心したのは俳諧で、点取俳諧の俳書の約170点、総数にして9万句あります。真田十万石ですから、真田九万句、まあ十万句と覚えていただいても結構だと思います。それから、俳諧一枚摺りも20点ほど伝来、あるいはもっと出てくるのかもしれませんが。これについては、今日お見えの伊藤先生にお聞きすればはっきりしたことが分ります。

00:16:00

他の俳諧資料は、俳諧紀行2点。これは実に大名の紀行としても優れた紀行です。これを最近伊藤先生が『俳句』という角川の俳句専門雑誌で紹介して下さっています。一つは、参勤交代の旅、それからもう一つは隠居後自由の身になって鎌倉、湘南、箱根を遊覧した旅日記、湘南紀行この二点です。これは絵巻物にもなっています。

それからもう一つは算賀集で、四十、五十、六十、七十を祝賀です。これらに収録された和歌の総数は約1100首、すべて幸弘公が詠んだということではなくて、お祝いに頂いたものを合わせた数です。それから、漢詩が約150、発句が270句。これは賀集に収められている総数ですので、もっと増える可能性があります。幸弘公自身も和歌、発句を作っています。しかし、今調べている感じでは、漢詩を詠んだ形跡はありません。先日、幸弘作として登録されている漢詩の軸を真田宝物館で拝見した

んですが、これは唐詩選を揮毫したものでして、ご自身の漢詩ではございませんでした。ただし、発句と和歌に関してはかなりの数を残されています。

00 : 18 : 40

さて、最も幸弘公が熱心に取り組んだのは、今、「真田連句をよむ会」で一生懸命読んでおります『喜久分根（きくのわけね）』あるいは『きく畠』と題された点取俳諧でして、これは実に170点、冊数にすればもっとあります。生涯かけて読んでも読み切れません。そこで、今日は若い方もお招きして、若い方に読み残した分はぜひ読んでいただきたいと、そういう大願がございます。

ここまで、幸弘公については概略しか申しませんでした。略年譜をご覧ください。私たちが知っている俳人では与謝蕪村、小林一茶とほぼ同時代を生きていました。蕪村は天明3年（1783）に亡くなり、一茶は文政10年（1827）に他界しました。この間、幸弘公は俳諧を楽しみ、文化12年（1815）に亡くなりました。

今日、私たちがこの会を催しますのは、科研費の補助を頂いたからですということだけではありません。これから、真田幸弘さんの研究を通じて、私たちがどんなことを願っているか、その趣旨をお話しします。

00 : 20 : 00

ひとつは「伝える」ことです。最初に申し上げましたように、ありがたいことに真田文書を大事に伝えて来ていただいています。これを次世代に伝えるということはきちんと読むことだ、と考えています。幸いに松代の古文書クラブの方を母体として「真田連句をよむ会」を作っていただきました。大変ありがたいことです。解説したものを私たちは未来へ伝えていきたいと思っています。若い世代に伝える。伝えることは中味もそうです。また崩し字・変体仮名は大変読みにくいので、それを読む技術を未来へ伝える。これは先ほど、平林さんからお話ありましたように、今日お見えいただきました佐賀大の井上先生、それから元熊本大にいらして今近畿大に移られました西田先生—九州の先生方が、何年もかけて松代の地へ来ていただいて、わたしも加えていただいたのですが、総合的に調査して書誌をとりました。ただ、資料が膨大すぎて解説するだけの時間がありませんでした。後塵を拝する者として、点取俳諧の中味を解説し、世代を超えて、未来へ伝えることを目指しています。

それから今、デジタル化の時代ですので、写真を撮って、それを難しい言葉で、これは平林先生にあとでお聞きしないと私はよく分からないのですが、アーカイブ化してデータとして、また画像として伝えていく。これも大切です。

お殿様が何を考えていたか、それから私たちはこれから何を考えていかなければならないか考えることに繋がります。

00 : 22 : 20

もう一つは「繋がる」ことです。産学協同というのは、理科系の学問ですとよくなります。そして、それは利益に繋がることがありますので、意義のあることです。文科系の私たちがそういった利益を生み出すことはできないでしょう。しかしながら、真田宝物館の学芸員の方が今日、協力していただいています。これは今日だけじゃなくてずっと我々の調査に協力していただきました。それから、長野市立博物館の学芸員の方も御協力いただいております。それから、古文書を研究する古文書クラブの方、清泉女学院大学、長野県立短期大学、長野県内の学生、今日わざわざお出かけいただいた北海道大学の大学院の院生、また、若くてまだ職は得ないのですけれども、大変優秀な研究者の方が東京から何人も来ていただいております。そういうふうにして、私たちはまずこの長野の地で繋がることは、直接利益にならないけれど、大事なことです。地域に根ざして、それぞれの地域とつながり、今後は、パソコンのネット上で、研究成果を世界の研究者にも発信して、繋がりをもちたいと願っています。

「伝える」「繋がる」という二つのキーワードの元にこの会を開催させていただきます。お忙しい中、本当にたくさんの方がご参集いただきまして、最初に申し上げるのも変ですけども、ありがとうございました。ではもうこれくらいにして、本題に入っていきたいと思います。よろしくお願いします。

00 : 24 : 51

司会

玉城先生、ありがとうございました。

玉城先生が今お話しくださいましたように、この会は「伝える」「繋がる」ということをキーワードとして、いろんな世代、いろんな位相の人たちがどのように繋がっていくか、ということも一つの研究テーマになっているのではないかという中で、今日は小幡伍（オバタアツム）さんという、まさに、何と言いますか、松代の生き字引ともいえるべき、元々高校で教鞭をとられていた先生なんですけれども、真田宝物館の古文書を読むボランティアとして長年、ものすごく読みづらい日記やお側に仕えていた人たちの記録資料を、地道に読んでいらっしゃる方が、今回、第六代藩主の幸弘公の連句についても、一緒に読むというふうに参加していただきましていらっしゃる小幡伍さんに、その連句を読む会の趣旨と活動内容について簡単にご説明いただきたいと思います。小幡さん、どうぞよろしくお願いたします。

00 : 26 : 55

小幡

只今、ご紹介頂きました、松代の、「真田連句を読む会」の会長の小幡と申します。会長などと申しますと大層に聞こえますが、世話役を仰せつかっているだけで、学者でも研究者でもございません。ただ、退職してから古文書を読み始めただけの素人でして、まったくこんな所へ立ってお話しするような立場の者ではないのですが、玉城先生の方からたっのお話があり、固辞しましたが、活動内容だけなら…ということでお話し申し上げる次第です。

「真田連句をよむ会」というのは、昨年8月25日にわざわざ玉城先生が松代の真田宝物館へいらっしゃって、宝物館の学芸員の先生方、それから私たち、それまで古文書を読んでいた者の有志が集りまして、この会の発足の打ち合わせ会を開いたわけです。

その時、玉城先生が話されたのは、現在真田宝物館に所蔵されている幸弘公の連句についての説明と、ぜひこれからその貴重で膨大な未読の連句の解説を、今後何年かかっても完成したいので、ぜひお手伝いをして欲しいということでした。はたして私たちに読めるかどうか全く疑問でしたけれども、たまたま松代六代藩主の連句を、文字通り当時の貴重な資料で読むという、願っても無いチャンスであると、私たちは思ったわけです。そんなことで、読めるか読めないか分からないけれど、なんとか頑張ってやってみたいということで、この会が発足したわけです。

00 : 30 : 00

会の名前も「真田連句をよむ会」ということになり、私が一応世話役を仰せつかって始めました。先ず、読む会の仲間を集めるために、玉城先生の方から、「もちろん古文書を読めるのに越したことはないけれども、連句や幸弘公、この殿様や俳句に興味を持っていて、なるべく長く続けられる方なら、どなたでも結構です」と、お話をいただいたわけです。

それなら、ということで参加希望者に呼びかけ、今まで一緒に古文書を読んでいた仲間たち、その中にはもう二十数年間にわたって読んでいらっしゃる先生格の方や、十数年も続けておられる方、ほんの数人だけでも非常に興味を持ってぜひ読んでみたいという方たちを募集しました。中にはまだ全然読んだことはないけれども、郷土の殿様の句を、ぜひ読んでみたいと参加された方も含めて、最

初は全部で25名程集まりました。

そしてその25名、さっそく宝物館の方で資料を用意していただきまして、百韻ということで百句ある一巻の連句を印刷し、それを皆さんに事前に配布し、いよいよ勉強会が始まりました。

第一回の勉強会は、昨年(2019年)の10月の15日に松代公民館で行いました。それはやはり初めてのことで、難しいものでした。今までの古文書とはちょっと勝手が違いまして、難しかったのです。そして、私も最初のうちは半分も読めないくらいではなかったかと思えます。今まで読んだ古文書というのはどちらかという、松代の宝物館からいただいた『真田家文書』の中の文書だとか、あるいは『御側御納戸日記』、『監察日記』、『家老日記』とか、そういう文書の一部分でした。それは考えてみれば記録文書なんですね。藩の記録であり、御触書みたいなものであり、例の人別帳、借金証文あるいは訴状だとか、そういう専門の祐筆の書いた文書であったり、お百姓をまとめる庄屋さんが書いたものであったり、まあ、本当にへたな字もありましたけれども、そういう記録書でした。

00:33:00

ところが今度、読ませていただいた菊貫さんたちの連句、点取俳諧という膨大なものの一部は、考えてみれば文芸、文学ですね。ですからそこには殿様はじめ、時代の人々の喜怒哀楽の感情、あるいは、人情の一端を切り取ったもの、自然の美しさを表現したものなど、実に親しみを感じる極めて人間味あふれるものだと感じました。最初は読むのも本当に難しかったわけですが、やはり、先生方に指導を受けながら読んでいき、なんとか内容が分かってくると、おもしろいことが分かってきました。そういうことで、最初のうちは、第一回目には20人ちょっとお集り頂いたと思うのですが、皆一生懸命に頑張ってみましょうということで始まったわけです。

初めて古文書に接する方は、とまどった方もおられたと思うのですが、何とか皆で意見を出し合いながら、まずは読む、解説する。変体仮名のくずし字というのは、確かにそれまでの武家文書なんかと比べますと大分違うところがありますけれども、これも、最初ですから仕方がないとして、何とか頑張ってお早く慣れようということで発足したわけです。

00:34:37

そして、もう今年の現在までに10回ほどになりました。毎月一度しかできないのですが、毎月第3木曜日の午後1時半から3時半位まで、2時間程度読み合せをしています。大体各班ごとに、最初4班ありましたけれど、ちょっとこれは無理だということで、残念ながら出て来られなくなった人もあり、今は3班に分けまして、大体15人位の方が常時出て来て読んでいます。

各班ごとにより予習して来ていただいて、最初20分から30分ほど下読みをし、それから、班別に順番に解説しながら読むようにしています。最初は本当に15句か20句くらいでしたが、この頃はそれでも50句くらい読めるようになりまして、先月でちょうど500句ほど読み終わりました。

もちろん、分からない所もありますが、分からない所は、最後には先生に教えて頂くわけですが、本当にみんな家で寝ても覚めても読んでいる方がいらっやして〈会場 笑い〉、そして分かった時の喜びというのは本当に言葉で表せない程の感激をしたという方もいらっやるわけです。私もそうした思いを時々しております。

00:36:23

そんなことで、毎回大変楽しく講読しています。古文書というものは不思議なもので、一人では読めないものでも、二人寄り、三人寄り、ましてや五人、十人と寄りますと読めるんですね。それはほんとうに不思議な気がします。それが楽しいことだと感じています。そして、最後にどうしても読めない時には、先生にお聞きすることになるわけですが、先生が的確な読みを教えてください、意味も分かることは大変有難く、うれしいことです。時には先生にも分からない時がありますが、これがまた私たちにとっては、うれしいことで、変な話ですけども、先生にさえ読めないとなると、私たちも

頑張らましよう、張り合いが出てくるわけです。ですから、そういう意味で、仲間で一生懸命勉強し合うということは本当に素晴らしいことだと思いますし、これからもぜひ、長く続けて行きたいものだと思っています。

そして膨大な我が町の殿様の句が、それもまだ、未読であるという事が魅力になってくるわけです。今まで読まれた事のない俳句が、我々の仲間で読めるということ、そしてそれを教えてくださる先生がおられるということ、これは本当に恵まれたかけがえのないチャンスだと思っています。

それにつけてもそういう会を立ち上げてくださったお二人の先生、そして資料を用意していただいた宝物館の学芸員の先生方、本当に心から感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。これからはいろいろご厄介になるかと思えますけれども、よろしく願いいたします。

それから、幸弘公、あるいはその連衆の方々が、具体的にどういう句を詠んだかというようなことは、最後のシンポジウムのところで紹介して欲しいと言われているものですから、その時に、わたしが一人ではなく、読む会で仲間と先生方のご指導のもとで読んだものですが、少しご紹介して菊貫さんたちがいかに殿様とはいえ、人間味のある人だったかということをお話できれば嬉しいと思っています。どうもありがとうございました。

〈拍手〉

00 : 38 : 58

司会

小幡さんありがとうございました。非常に記憶が鮮明で、何年何月に何人集ったというような、私どもも忘れていたようなことまで再現していただきまして。

おそらく小幡さんは今日本の中で、あるいは世界の中で一番幸弘公の連句を読んでいらっしゃる方になると思います。毎回毎回の会でも、本当に詳しくまた丁寧に予習して来てくださっているのもう私なんかは足元にも及ばないお力で精力的に読んでくださっています。

で、『江戸座点取俳諧集』という岩波から出ております新日本古典文学大系を小幡さんは、座右に置きながら、幸弘の用字と付き合わせたりして、用語やなにかもこういうふうに『江戸座点取俳諧集』では読まれてましたよということを、逆に教えられたりして、本当に毎月第3木曜日の午後、1時半から3時半、真田公民館で2、3時間ゆったりとした時間の中で、江戸のお殿様の連句を再び私たちがなぞるといふ時間が、日々の雑事に忙殺されている中で、私も玉城先生もとても楽しい時間になっていて、毎月通わせていただいております。

今日お見えの方で、またこのシンポジウムをきっかけに興味を持たれた方は、宝物館の方までご連絡いただいて、また一緒に幸弘さんの連句を読んでいかれたらと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、続きまして最初に、今日は遠方からお見えの先生お二人に御講演をいただくんですが、最初に西田耕三先生に「細川重賢の俳諧」ということで御講演いただきたいと思っています。

西田先生は石川県にお生まれになりまして、東京大学をご卒業後、長く熊本大学の方で教鞭をとっていらっしゃいました。そして、その九州にいらっしゃる時代に井上先生と一緒に精力的に熊本藩ですとか、鍋島藩ですとか九州一円の大名の文芸活動について調査をされていらっしゃいまして、松代にも調査に見えていらっしゃいました。私事ですが、西鶴という浮世草子作家の研究をしているんですが、西田先生はその井原西鶴の研究においてもわたくしなど学部の時代からご立派な業績をあげていらっしゃって、まさかその西田先生を今日ここにお呼びすることになるとは思ってもいませんでしたけれども、西田先生には非常になんと申しますか、洒落なお人柄と、それと多少ギャップがあるようなすごく豊かな表現力の御著書が多数おありでして、最近は勸化僧などについての御著書なども大変精力的に出版されていらっしゃいまして、現在は近畿大学で御教鞭をとっていらっしゃいます。

それでは西田先生、よろしくお願いいたします。

00 : 42 : 28

玉城：「先生、お掛けになった方が」

西田：「ええ、ええ」

玉城：「立っていた方がいいですか」

西田：「後で……」

玉城：「ああ…そうですね 〈会場 笑い〉」

西田

先ほどからお話をうかがっていて、非常に嬉しいというか、偉そうな言い方ですけども、この真田の大名俳諧がいよいよ形になっていくのかなあと。これ本当に念願だったんですね、井上さんもそうですけれども。それが玉城さんを中心として他の皆さんのご協力がいよいよ形になっていくんだなあと思うと非常にもう慶賀すべきで、ものすごく時間かかると思うんですけども。

それで、私どもは、先ほど紹介していただきましたけれども、熊本の細川重賢の俳諧というのは形になったんですね。もうすでに、こういう形で活字化されたんです。で、まあ、研究はそれ程進んでいないんですけど、一応形になりました。15、6年前ですけども。それを振り返ってみるのもこの際いいかなあとと思ひまして、ちょっと過去の話になりますけれども、細川重賢の俳諧、ま、大名俳諧ですけども、それじゃああの、これをもって座らせていただきます。〈会場 笑い〉

それではですね、プリントを3枚用意してきました。これに従って40分間お話をさせていただきます。

大名がなんで俳諧をするのかという、ま、好きだから、大名も人間だからという事でいいと思うんですけど、馬場存義という江戸座の俳諧師、専門家がいてですね、その馬場存義が細川重賢にこういうふうに言っているんですね。「俳諧っていうのは非常に小さなものである」と。しかし、「あなたは政治家で、政治家はやっぱり下々の実情を知らなきゃいかん」と。「それには俳諧が一番いいんだ」という事を言っているんですね。そういうといかにも俳諧をですね、高ぶった言い方のように聞こえるけれど本当なんだと。そういう面で、つまり大名というのは政治をするために俳諧をやるという一面も全くないとは言えないと思うんですけど、ただ、そう思ってやっていたわけではないわけで、やっぱり好きだったんだろうと思うんですね。江戸時代にはたくさん大名がいたわけですけども、それ程いないわけですね、俳諧に精を出したというのは。ですからやっぱり根は好きだったということがあるのかなと思います。

00 : 45 : 49

それでその、一番の資料1 ^{しげかた}細川重賢は1720年の生まれで、先ほどの幸弘公より20歳年上です。で、熊本藩8代藩主になりました。先程ここに出たのでは6代藩主になっています。ま、6代か8代か、いろいろあるんですよ。加藤清正から数えると8代で細川家になってからは6代なんですね。それで、両方使っていますけれども。それで、6代の^{のぶのり}宣紀、^{せんき}宣紀。この宣紀っていう人は非常に漢詩の好きな人でした。で、その子どもの^{むねたか}宗孝が跡を継いだんですけども、子どもができなかったんですね。宗孝、で、これご存知の方も多と思うんですけども、殿中の刃傷でこの宗孝は殺されるんですね。江戸時代通じて、浅野の刃傷もありましたけども、十何回かあるんですね。その一つでトイレで殺されたという。板倉修理という旗本に。要するに人違いだったようですけどもね、結局は修理は乱心という事で切腹になりますけれども、それで宗孝さんはまあ翌日死んだという事になっておりますけども、それで弟の重賢が跡を継いだという。このとき、重賢28歳なんですね。部屋住みの時代が非常に長い。ですから、暇で暇でしょうがないわけでしょう。大名の仕事もしないし、遊んでいるわ

けですから、いやが上にも教養と遊びの充実した人間になっているということなんですね。そういう典型的な人だと思います。多趣味で遊ぶ事も好きだったですね。

ですが、まわりの家臣がたまたま優秀な人たちが多くて、それでまあ中興の祖と言われているんですけども、本人は鷹狩りとか、遊びとか、俳諧もそうなんですけども、やっていて、しかし、それが上に立つ者の器量なんでしょうね。で、俳号は華裏雨と。この字の裏という字は、裡を使う時もあるんですけども、これはある大名からですね「重賢さんあなたの俳号はなんと言いますか」と聞かれた時に答えた、その手紙も残っておりましてね。それにははっきりと華の裏の雨と記しております。まあ、正式にはこうなんですけども、字はいろいろ使ってますね。リという字は。

二番目に松平重寛しげひろという人を出しましたのは、この後に書きましたように、これも鳥取なんですけれども、松平重寛の母親の桂香院けいこういんという人、これが夫が死んだ後ものすごく強大な権力を持った人といわれているんですけども。で、それが先程申しました細川重賢の妻、静証院せいしょういんの妹なんです。つまり、重賢から言えば甥になるわけですね、血はつながってませんけども、甥の位置にある。ですから非常に大事にしています。鳥取の松平重寛という人を大変大事に。それで、俳号は玉馬ぎよくま。この人は二歳で藩主になるんです。そういう事もあって重賢は後見役のような意識だったんじゃないかと思うんですけど。で、玉馬という名前はよく俳書にも見えます。それから、一番私の見た中で出てくるのは『宴遊日記』という、この一枚目の下の段の右端に、大名の俳号というふうに書いてある所。一行目、花咲一男さんの『柳沢信鴻のぶとぎ日記覚え書』という、これ非常に参考になる本ですけども、この柳沢信鴻の日記の一つが『宴遊日記』、それを見ると玉馬ってというのがやたら出てくるんですね。35、6年の人生ですけど。だから相当好きだったんじゃないかと思うんです。

00 : 51 : 27

その人が重賢の甥という位置で、ただ、熊本の俳諧にはそれ程出て来ないんですね、どういうわけか。

資料の1枚目の下の所、御覧いただけますかね。『重賢公御代御代筆控扣しげかたこうみよこだいひつひかえ』と読んだと思いますが、重賢の時代の手紙なんです。重賢の出した手紙の控えが600通くらいあるんです。祐筆が書いたものなんですけど、それを後でまとめたもので、この三分の一が玉馬宛なんです。俳諧じゃなくて手紙ですからいろんなことが書いてあるわけですけどね、ですから先程言いましたように気にかけていた存在ということで、ここにあげました。

それから、三番目『細川重賢俳諧資料』という、これが今回持ってきました出水叢書という叢書で、出水というのは、熊本に水前寺公園というのがありますけれども、藩主のお茶をやる所になっていて庭園になっているんですけども。そこに出水神社いずみというのがあるんです。小さな神社ですけど。そこの祭神がなんと細川家の殿様なんです。三人ぐらい。差別して三人だけあげて、それが祭神になっているんですけど。そこの氏子の代表が前に総理大臣やった細川護熙の父親、護貞さんとおっしゃるんですけど、その方に戦時中の、近衛内閣の、近衛さんの娘婿なんです。ですから、政治にも関わっていた人ですけども、戦後は完璧に文人として生きた方。その人が出水神社、あそこ水前寺公園でお金を取るんですね、入場料。「その金をもっと文化的なことに使え」と護貞さんがおっしゃるんです。「私は人生に悩みがあったらね、坊主には相談に行くかもしれないけれども、あなた方、神主なんかには絶対いかない」と。「せめて文化的な活動をしろ」「何も人の役に立っていないんだから」とね。〈笑い〉

私、その現場にいたんですけどもね。その神主たちもさる者でね、その時、細川護熙という人は熊本県知事だったんですけどもね「今の県知事は、あなたのとこの息子さんは、何も文化的な事をやってない」と。パソコンやら何やらそんなことばかりやっていてね、だから「お互い様じゃないですか」みたいなことを言われてね。

それで、お金を出水神社が出して、「永青文庫」っていうんですけども、そこにある貴重なものをかたちにしようという、それがきっかけです。

熊本の大名俳諧の研究は、井上さんが一人でコツコツとやっておられました。私もその後加わったんですけども、その後こういう話があったものですからね、やっぱりこういうきっかけがないとなかなかやらないんですね。とにかく膨大なものですから、なかなかそういうきっかけがないと。あったんですね。細川護貞さんという人は、私たちにとってはありがたい存在なんです。

次が4番です、右側。今日は時間もあまりありませんので、大名俳諧がどういう形で行われるのかということの概略を申し上げて、真田俳諧との比較はちょっとできないと思うんですけども、それが割とコンパクトな熊本の大名俳諧、少しは分かりますので、それを申し上げたいと思います。

00 : 56 : 35

興行という言葉を使っていますので、俳諧興行、それをここでも使いました。五番目の連衆というので三つ上げてあるんですが、他の大名ですね、それから家臣。それから俳諧宗匠も入る時もありますね。点を付けてくれる場合と実際に俳句を作る場合とあります。それからお城坊主、能役者とその3種類に分けましたけども、ここは当然他の大名が中心になるわけで、大名との連絡ですよ。いつ、俳句をしましょうかと。私の所でやりますか、あなたの所でやりますか、という。そういう連絡はするわけでしょう。それは書簡でわかります。手紙を出しているんですね、まあ、江戸時代ですから。

それからもう一つは江戸城、登城時と書きましたけども、毎月1日と15日に、お礼に江戸城にあげるというしきたりになっていて、その時に、先程みましたけれど、井上先生の資料の最後の方に付いてましたね。控え所ですね、江戸城に行った時に控えの間が七つぐらいあるんです。大名を七つに分けていて、私は最初、同じ、例えば大広間にいる人が退屈しのぎに話をしながら、と考えていたんですけども、どうもそうでもないみたいですね。

五番の資料の連衆の、他の大名という、それを見ましても、すべてが同じ控えの間ではないですね。ですから、これもまた、そうではないだろうなと思います。控えの間を行ったり来たりして連絡し合うことは絶対できないと思います。江戸幕府の恐ろしい締め付ける制度の中ではね。ですから、書簡とか使いを出すとか、そういうことかなと思うんですね、連絡は。

それから興行場所は江戸藩邸が多い。細川の場合はほとんどそうですね、江戸です。熊本に戻った時は、ほんのちょっとしか、それでも2、3回はありますかね。途中、参勤交代で帰る時に3、4回あるんですね。それから上野の寛永寺でやっている。もちろん他でもやっている。残っている作品で申し上げているわけですけどもね。ですから、圧倒的に江戸藩邸が多い。表海楼^{ひょうかいろう}という部屋と蘭囃^{らんしょう}閣^{かく}という部屋があって、大名によって区別をしているんですね。気の張る大名だったら蘭囃閣に呼んで、それで大した、大したって言うのもなんですけども、〈会場 笑い〉親しい大名だったら表海楼、常の居間って言っているんですけど、そこでやるんです。これ、歴然としているんです。そういう意味では、これ、参考になるんですね。細川重賢にとってこの大名は気の張る男かどうかっていう。

01 : 00 : 46

それから点取帳の回覧っていう、一応終わりますよね。俳諧が終わってそれを俳諧宗匠に点を付けてもらいますよね。だいたいそれ5評とか7評とかいっている、5人の宗匠に点を付けてもらう、それが5評という。帳面見みたいなのにその時の俳諧を、五冊分同じものを書いて、それを五人の宗匠に渡すと。だいたい十日位ですけど、戻ってくる。戻って来たこれ点取帳、これ「返し」って手紙なんかでは言っているんですね、ちょっと我々のイメージと違うんですけども、「返し」っていいんですけども。

この返しを回しますよね。例えば細川重賢が主催すると、俳諧宗匠から戻ってきます。そして五冊分、それをね、その時参加した大名に回すんです、当然ですけどね、回します。それで、時間があるとね、返しには作者名書いてないですよ、当然、点を付けますから当然書いてないです。後で入れる時もあるんです。しかし、最初はないんですね。それと付箋など付けて回す場合もあります。それから、点者、俳諧宗匠によっては、時間がかかって同じ時に来ない場合は先に来たのを先に回すと。一冊あるのを回すとか、いろんなケースがある。これが面白いので、資料書簡の1は約束をするもので、2から次の二枚目の6までが全部点取帳の回覧の手紙です。細川重賢がこれ宛先を書いてありますけれども玉馬様とか、そういうような、消息っていうか、それは後で見ますけど。

それで、もう時間もあまりありませんので、この、連絡っていう下の資料の1ですね『御代筆扣』の1の所を見ましましょうか。安永四年（1775）10月22日、玉馬様と俳号で呼んでいるんですね。読んでみましましょうか。

「拝読 二十五日御出の議」つまり二十五日に細川重賢の所で主催するんです。その三日前にこういう「昨夜 貴意を得」ま、了解、いいですよっていうことでしょうか。「貴意を得候について」ですか「御楮上の趣」つまりはまた玉馬から「いいですよ」って手紙が来たんだと思います、もう一回。「御念に入れらるる御事に存じ奉り候」。使者を遣わして来ただけじゃなくて、手紙も来たという事だと思うんですね。「右の節」この十月二十五日、この時には三花これは青木甲斐守の俳号なんですね。「三花相招き候よう仰せ下され」つまり玉馬はその時は三花さんも一緒に呼んでくれと言って来たんでしょうね。「承知仕り候」。これは、括弧書きにしてありますが、鳥取藩の『江戸御留守居日記』というのを——玉馬は鳥取ですので、私、鳥取の藩政資料はわりあい簡単に見られますので——見た所、この二十五日、実際に俳句をやった時にはこういうふうになっています。「九つ時の御供揃えにて 細川越中守様へ御出で遊ばされ候」という。細川の館へ行ったということが裏付けられている。俳諧というのはどういうわけか細川の資料に俳諧っていう言葉ありますけれども、鳥取の資料にはですね、俳諧っていう言葉は、私は一度も見たことないですね、どういうわけか。どどこへ行ったということはしょっちゅう出てきますけれど、俳諧のために行ったとか、蹴鞠のために行ったとか書いてないんですね。それは資料の性質にも拠るんだと思いますけどね。『御留守居日記』というまあ、公のものだからかもしれません。で、これは裏付けがとれるんです。これはまた、作品が残っているわけです。で、今日は一点集中というか、安永四年、十月二十五日の俳諧興行についてこういう約束が一つある。で、実際の俳諧が二枚目の下の段と上の段と言いますか、上の段の下の方にある32段の百韻書き起こし、安永四年、十月二十五日、表海楼という、これはさっき言った気の張らない仲間ですね。これが先程の三花を呼んでくれという。で、三花は登場して来ませんからね、多分都合が悪かったんだろうと思いますね、青木甲斐守。

01 : 07 : 38

で、原本といますか、これを整理したものが下なんです。下が資料でこれをせっかく真田の俳諧を読む会なので、わたし上の活字を読みますので下ですね、原本を見ていただいて〈会場 笑い〉、今更間違いを気付かれても悲しいだけなんですけれども〈会場 笑い〉、まあ将来のためにちょっと見ていただきましょうか。

「初時雨猿も小蓑をほしげなり」「こゝろまかせに 冬枯の旅」「枝垂し松も齡の杖つきて」「客の望みにかなふ饗応」ま、饗応ですかね、なんというかおもてなしですか、ま、饗応。「一ト番飛入なしの碁石鶏」ま、闘鶏の情景のようですね。「押におし合初摺りの場」ちょっと下、虫食いもありますけれど「腰の鍵からり／＼と暮の月」「詠むるうちのついでこほれ萩」「我が書た手紙の読めぬ二日酔」これはいいですね。〈会場 笑い〉こくるとほっとする。昔もいたんだなあというふうですね。〈会場 笑い〉「痛入たる妻の献立」。次はね「きぬぎぬと」ま、起きる起きると読みましたけ

ども、いいんでしょうかね「起々の素顔恥し鉢たゝき」ま、鉢叩きは朝だからだと思います。暁に鉢叩きがあるんでそういうことなのでしょうね。「余所に聞かれぬ」次がですね、意味も何も分からないんですよ。字は「左遷の貝」と読めますでしょうかね。「左遷の貝」って〈会場 笑い〉まあ、ここは後でそっと教えてください、それ違うよって。「さすらい」か「ながされ」か何かそう読まれるんでしょうかね。「風上に干鯛俵^{ほしか}そうかりける」「夏を忘れに 這入る」これ「土手蔵」って読んだんですけど、これも何かちょっと怪しいですね、意味がよくわからない。「土手蔵」っていう、ただの「くら」なら分かりますけど、夏涼みに入るっていう、「土手蔵」って何だろうっていう。「気にかゝる夢を聖の言消して」「泊り合ては腰を抱く後家」。ま、しょうがないですよ、〈会場 笑い〉産気づいたからしょうがないですよ。〈会場 笑い〉

「宗長か庵を尋る川つかへ」。川づかえは川止めの事ですから、暇で暇でしょうがないからこの辺の宗長の庵を訪ねたっていうことですよ。「萩の垣根をらりにする馬」乱離、乱離骨灰、むちゃくちゃにするという意味だと思います。

「雷の落た沙汰有る田は実り」「月の夕へをよこす雨露」

「物好て新に出来る花の幕」「黄蝶遊ぶ井出の玉河」

まあ、こういうふうになっています。これは、詠んだ人ですね、玉馬と華裏雨と李蹊という人。燕里がどうだったかちょっと記憶にないんですけど、これは大名だと思います。李蹊はちょっとはっきりしないんですけど、先程の『新日本古典文学大系』には詳しくありましたから、それを私今回見て来なかったんで、九州の久留米の大名かなあとと思っているんですけども。

01 : 12 : 27

これが、これやりましたね。あと10分ですね。（3時までです）

そしたらですね、もう一つね、あと、こういう作品ができた。7人の宗匠に送ったわけです。先程申しましたですね、返しというのは、形式が決まっているんですね。こういうふうに先程帳面って言いました。1ページに4句ずつ書いている。これは井上さんからいただいた鶴岡のもので、これは熊本のものなんですね。これをお返ししますので、ちょっと見て、これが返しなんですね。これがどうも真田にはこの返しがあんまりなかったように思いますけどね。鶴岡と熊本にはあるんですけども。真田の場合には最終的な記録はたくさん残っているんですけど、宗匠に持っていった厚い表紙の、中真っ白なんですけど、それに作品を書いて宗匠に点を付けてくれという、それなんですね。それまあコピーなんですけど。それがない、なかったように思います。それがちょっと比較して特徴かなと思います。

すみません、それでですね、もう一言だけ、二枚目の資料の⑥ですね、それをご覧いただきたいんです。これは返しを一覧した後、どういうふうな反応になるのかという、それがこの手紙に、玉馬宛の手紙にあるんですね。

で、安永四年十一月十九日「しかれば廿五日の巻」その巻なんです。十月二十五日の、それ十一月十九日の手紙でその事について書かれている。「御覧成されたき由承知仕り候」、結果が気になるわけですね、自分の俳句がどう評価されたか。「披^{ひらき}」っていうのは点者から送って来たものを開示するっていう事だと思います。「披 相済候に付き」、もう全部終わりましたから。「則ち七評」七人の点者の点ですね。「御使につき呈進仕り候」、差し上げます。ご覧ください。「直ちに御留置きなさるべく候」、ここが問題なんです。直ちに留め置いてください、玉馬さん、留め置いてください。それはですね、この二枚目の一番下の段を見ていただきましょうか。ここに先程の読んだところのその最終評価の部分をコピーしたんですけど、これ全部買明から鶏口、宗梅までですね、みんな玉馬が一位なんですね。玉馬が全部良かった。ただ、温克だけは田旦、これお城坊主です、細川家と非常に親しかったお城坊主、これだけが一位なんですね、そういうことを頭に置いてもう一度先程の6

番の先を読みますと「右の内田旦勝は」、その返しは「参上の節御渡下さるべく候」という。こういうことなんですね。「玉馬さん、あなたは6人分勝ったからそのまま持っていていいですよ」って。ただ「田旦の分は」ま、敬語じゃないけれど親しいからでしょうね、「田旦の分は、私がそっち、行った時にください」と書いてある。そういう文面に読めるんですね。

それで確かにですね、この時の俳諧の他の返しは全然残っていません、永青文庫には。ただこの田旦の分だけは残っているんですね。ああ、やっぱりそうかっていう。主催者は全部記録をします。真田も全部そうですけども。返しはですね、勝った、自分が一番の点者の返しは、自分が貰うんだと思いますね。ですから、全部が全部残っていないんですね、主催者であっても。ですから記録しておかないと、何もなかったということになるんですね。

01 : 18 : 12

それで、ちょっと時間がないようですので、最後に三枚目は、この菊貫が一座したってという資料、残っている資料を見ましたけど、これだけだったような気がします。先程の花咲一男さんはキクヌキと読んでいますけれども…。根拠はわかりません。我々はまあキクツラと呼んでいますので、キクツラでいきますけども、この上の段の、これすごいんですね、すごい点者数でやっていますが、これは要するに上から下に見ていくんですけども、菊貫は上の段の後ろの方ですね、最後の所に出て来ますけども、これをコピーしてございます。結構点数はいいんですね、菊貫さん。句の右側が点数なんですね。これ、一目瞭然です。人によって評価が違うということもわかりますし、だいたいやっぱり良いと思う句はだいたいいろんな点者が評価するという。

それで左下を見ますと、これも先程の最終的な評価ですね。そうすると、菊貫さんは3人の点者が一位に上げていますね。楼川と菊堂とそれから連馬ですか。この菊堂というのはこれは大変ね、菊貫さんは鼠兎にしていたようですね、俳諧宗匠ですが。菊堂さんを鼠兎にしていたということ、花咲さん書いておられます。

そういうことで、最後、二枚目の上の方に資料付けておきました。これは『懐中日記』っていつ、これくらいの大きさで重賢が懐中していたっていう、そんなふう書いてあるわけですね。これ、1日が1行で、印刷してあって見にくいですけど、これにはですね、10月25日は何も書いてないんだ。ここは本当は、俳諧の印がなければおかしいんですけども、これがないんですね。だからこういう、あんまりやりすぎて書くのを忘れたのかもしれないんですけども。20日の七評てありますね、丸を付けてある。これは作品が残っています。それでまあ、ついでにですね、印は丸は蹴鞠です。マルはマリをやるという、丸いからでしょうかね。〈会場 笑い〉それで三角は勉強会なんです。それで俳諧はね、ここにはありませんけども四角を印してあるんです。それから鼓のようなしは能ですね。

ついでにちょっと分りにくい所を申し上げておきますと、17日の前から2行目の、ヤツシロと読むのかヤシロと読むのか「八代星」ってございますね。これ何なのか、分からなかったんですが、これ多分馬だと思います。馬の名前か種類か分かりませんが、ヤツシロかヤシロか、それでホシ、星栗毛というのがありまして、何^{なんき}寸^{すん}って言いますよね。何寸、何歳って馬の事言いますが、そういうの、他の部分にありますので、これ責め馬の印じゃないかなあというふう。

それから後ろの方の、後ろから3行目ですかね。これは最初、興味の興かと思ったんですけど、奥ですね、奥料理。これ奥様のことだと思います。奥さんは途中失明するんですね、由婦姫という。失明するんでこれを大変大事にしています。そのユウヒメも俳句をどうもやっていたようです。場所が前の方のプリントで、場所は分からないですけどね。由婦姫というのは正妻ですから、江戸を離れるわけではないので、江戸の辰口っていう所なんですけど、辰口の藩邸の奥の間にあるんだと思うんですけども、わたし、地図を一生懸命見ましたけども、ないんですね。ですけど、珍しいことに蘭舟って

いう名前で、細川重賢の奥方も俳諧をしているんですね。

そういうことでこれで終わりますけど、参考にはなりませんけど、振り返っただけなんですけど、まあ真田にもある問題かなと、そういう観点ももしかしたらそのうち参考になるかなと思ってお話ししました。

雑駁な話で、失礼しました。

01 : 24 : 11

司会

西田先生、どうもありがとうございました。〈会場 拍手〉

九州の細川家の大変調査が進んでいまして、また資料も充実した物を見せていただいて、連句を読む会の方にとっても大変興味が深く、また、参考になったお話でした。

本日は連句の実作をなさっていらっしゃる方も何人かお見えですけれども、今はメールで一斉送信で連句のやりとりなんか簡単にできるんですが、当時はこのように書簡をやりとりしながら、返しを回覧しながら、点を付けてお殿様たちが連句、俳諧をやっていた様子が、非常に目の当たりに分かって、面白く拝聴させていただきました。どうもありがとうございました。

では、ここで少し休憩を入れたいと思います。ありがとうございました。

平林（司会）

時間が来ましたので、シンポジウムの方、後半ということで再会させていただきたいと思います。熊本に続きまして今度は島原のお殿様が登場するようでございますけれども、井上敏幸先生は九州大学をご卒業後、福岡女子大学で長く教鞭をとられた後に、佐賀大学に赴任されまして、現在は佐賀大学名誉教授、そして佐賀大学地域学歴史文化研究センターの特命教授でいらっしゃいます。近世文学研究において、井上先生のお名前を研究者の中で知らないものはないという、そういう存在でして、九州に井上先生ありということで、私たちずっとその背中を見ながら歩いて来ているんですけれども、先生に今日は「真田幸弘と島原松平家の俳諧」ということで、御講演をお願いしたいと思います。先生よろしくお願い致します。

00 : 01 : 22

井上

ただいま紹介にあずかりました、井上でございます。

大名の点取俳諧といいますと、先程の西田君が、西田君とは同い年でございまして二三ヶ月兄貴でして、若い時からとにかくお酒を飲む方が調査よりは多かったと〈会場 笑い〉。芻頸の友、西田君であります。熊本の永青文庫の本を数年間といましようか、毎夏見ていたんですけども、その中で「連歌一箱」というのが出て参りまして「レンガヒトハコ」ってなんだろう。まさか建築用材じゃあるまい」というので見ましたら文献が出て参りました。それがはじめてございました。それからそれが済んだらば、その頃鶴岡酒井家にもあるという情報が入りましたので、永青文庫の本を出したら「じゃあ一緒にいこう」というので見に行きましたら、三千句ぐらいありました。一応まとめてあります。酒井家をやっておりますと、十代忠徳公が新潟の梅^{ばいごう}郊だとか、それから真田家、あるいは秋田藩佐竹家と交遊がある、そういうことがわかりまして、「真田にはあるぞ」ということで押し掛けまして、嫌がる原田さんを追い回しまして、とにかく「あるんだ」ということで、出してもらいましたら、先程来、玉城先生から、大体説明頂きましたが、思いもかけない大量の資料が出てまいりました。

残念ながら、懐紙帳類が少ない。懐紙帳入れの袋があるんですが、その袋を往復の便で使うんですが、その袋にいろんな、何日誰々のお祝いをするとか、誰々の俳号を付けたので小さいお祝いの小短冊を刷ったからちょっと送るとか、もう色々な情報がその袋の中に入っております。それが懐紙帳の間に挟んであります。真田のようなきちんと整理したものすごく立派な保存ということをした場合には、ひょっとしたらそういうものだけを集めたドンゴロスいっばいの袋入りの資料がどこかの隅にあるんじゃないかと思えます。それが出てくれば詳しいディテールまで分かってくるかと思えます。

ところで、私たちの科研費による研究の終わりがけに島原松平文庫を見ようという事で、共同研究員みんなで長崎の島原へ行きました。それは真田幸弘さんの妹さんが島原の殿様のお嫁に行っていたからです。斗来公^{とらい}という人です。この人が俳諧に非常に熱心でありました。

00 : 5 : 31

先程の西田君の話の叔父と甥の関係ですね。まったくそれと同じ関係が成立しております。斗来公（第六代）の奥さんは、幸弘公の妹藤で、その二人の間の息子が升来公（第七代）ということになります。升来公の奥さんは井伊直幸公の女鐸^{たく}で、俳号は鶴媛^{かくえん}です。この方が斗来公を凌ぐくらいに俳諧が熱心であります。で、そういう事を中心にちょっとお話をしたいと思います。

資料の順序でまいりますと、まずAの所の斗来公、升来公、そのところでございますが、松平文庫には30点程のものがあります。松平文庫は戦後最大の日本文学の古典の発見という事で、昭和三十

年代初め、大ニュースになったところですので、何かあるだろうということで行ったのですが、やはり、片鱗が残っていたわけです。

これを見ていきますと、この中の資料の特徴は5番、7番、8番、9番、11番、12番、13番、15番、それから二枚目の21番、これらの発句が「群れつつのひのはしめや花の春」で同じなんです。ところが、脇が違うんです。

5は、最初は「四海を磨くあら玉の年」、7は「霞むる毎に笑ふ四方山」、8は「枝もならさぬ御代の門松」です。「枝もならさぬ御代の門松」は6巻残っております。「霞むる毎に笑ふ四方山」は2巻。「四海を磨くあら玉の年」はこれ1巻だけで、これは懐紙帳で残っております。

これはどういう事かといいますと、同じ発句を使って3回別の百韻を巻いたということですね。これは時々見られることです。ここに特徴があります。

それからこの懐紙帳には連衆名がほぼないわけですが、点者名は、読めない文字を除きますだいたい読むことができます。連衆名がわかる分ですが、その中の7の所には御とありますが、これはおそらく殿様のことだろうと思います。

それから、21の所を見ていただきますと、ここは斗来公、巴章、巴人、桂枝、素文、露弓という連衆が出てまいります。もう一つ連衆名がわかるのが、14で斗来、暁鳥、起十というのがわかります。それからもう一つ、26ですね、斗来公、桂枝、巴人、巴章、素文で、だいたいこれらの人物が連衆だろうとわかります。それから30番の「評点紙断片 一枚」、これは評をした断片だったわけですが、ちょっとどういう形だったのかはよくわかりませんが、結果は、斗来公が天で一番上、その次は地の菊貫が二番目、人の陸州が三番目ということになります。評点の合計でその時の天地人を出したということです。

島原の場合には非常に不完全な残り方ですし、少ないですから、俳人の名前などが分りにくいのですが、先程出て来ました中の人物達を見ていきますと、Bのところを見ていただきますと少しわかります。

00:11:42

Bを見てまいりますと、これは松代にあります『六十賀』それから『七十賀』とに出てまいります斗来公、鶴媛公、更に家臣などの和歌、漢詩、俳諧発句作品、それから贈答の記録ですね。誰に短冊を何枚贈るという記録。それから作品を送り返してもらった一人一人へお返のお礼を贈るという記録も残っております。これらは、科研費の中で翻刻をさせていただきますと、今活字で見られるようになっております。

ちょっと見てまいりますと、斗来公と申しておりますのは、松平忠頼のことです。かれは、松平家第七代の当主で七万石の殿様です。この方の発句がそこへ二つ並んでおります。それから寛政十年の『耳順御賀日記』という記録に「短冊配布」「祝儀贈品」それから「答礼品」の一つ一つが書いてある。

その次に、松平主殿頭の室、鶴媛公の発句があります。これが七十の賀の折のものですね。『千とせの寿詞』にも鶴媛公の発句があります。それから鶴媛公の歌の名は「多寿子（タズ子）」とありまして、六十の賀の時にも七十の賀の時にも歌を贈っていることがわかります。

それから、御肴一折、お祝いの饅頭が、これは答礼品だと思います。そういう記録があって、非常に丹念であることがわかります。また、先程の百韻の連衆の中に巴人という人がいたんですが、この方は島原藩の『藩士明細帳』というのがございまして、それが大変詳しく便利ですが、松坂丈左衛門という人で、二百石に役料百石付いて、側用人であることがわかります。

それから、俳人の方はですね、俳諧をやっている人を探していきますと、次の四枚目の所には、廬舟という人が出てまいります。この人は富永十左衛門で、やはり側用人であります。それからその

次松尾幾之丞、松子の俳号で、この人は大横目です。それから酒井太郎右衛門、これが俳号洋峨で大横目。それから、島田平右衛門、無節。俳号が六十の賀の時には山鳥で出てまいりましたが、七十の賀の時には無節。八十八歳と書いてあります。この人がやっぱり用人格であります。こういったことがわかってまいりました。

俳諧をやっている連衆というのが藩のトップクラス・中核にいる、教養も高い人達であることが確認できたように思います。こういうことをやはり考えておかないといけないのではないかと考えさせられました。

00 : 16 : 38

それから、三枚目に戻ってもらいますと、上段の左端に岩瀬勘平という人が出てまいりますが、この人は藩の儒者で、島原の稽古館を作った人です。用人であると同時に漢詩をお殿様幸弘公に贈っている人です。

それから、下の段の市川五郎大夫という人がおりますが、これが奥大目付で、光甫の名で和歌を幸弘公に贈っています。また、四枚目の下の段の佐久間文治という人ですが、この人はお医者です。江戸で呼び出されたお医者のお医者様で、純倉、これはスミクラと読むんでしょうか、その名で祝いの歌を贈っていますと同時に佐維章という号で漢詩も贈っております。やはり医者ということで和漢に通じた学識の高い力であったと思われれます。江戸におります佐久間文治と島田平右衛門、ちょうどこの頃江戸にいたんでしょうか、この所へ松代の真田家から贈答品が送られてくる。こうした中継をここでやっているという感じが、『耳順御賀日記』から読み取れます。

今、斗来公、升来公、それからついでに用人格、あるいは俳人の身分のことを申しましたんですが、その基本に戻りまして真田家と松平家の関係ということをちょっと見てみます。五枚目の真田系図を見ていただきたいと思います。これは真田宝物館でいろいろ図録を出しておられますが、その中のものを使わせていただいています。ちょうど真ん中の線の所が殿様でございまして、五代目が信安、六代目が幸弘、大殿様と書いてある幸弘公。幸弘公の左、真松院は、松平定賢娘。お父さんが定賢、白河藩主であります。ですから、幸弘公の奥さんが松平定信のおばさんに当たるわけですね。ずっと左にいてもらって、定邦から定信になります。定信はもちろん、養子として入るわけですが、老中になります。文治の象徴だったことは言うまでもないでしょう。この定信と幸弘と甥・叔父の関係になります。こういう関係が真田家にできたことが、和歌、漢詩、俳諧、また様々な文治のバックボーンとなったことは疑いようがないように思います。

00 : 20 : 56

定信のことが先になってしまいましたが、松平家の方で考えて見ますと、松平家の第六代が松平忠恕、その忠恕の奥さんは、幸弘の妹、珪樹院、名前は藤（フジ）ですね。数寄屋橋御奥様と呼ばれていた方です。忠恕と珪樹院の間に生まれたのが、ここには書いてありませんが、松平忠馮で、この人が升来公ということになります。そして、この人が升来公、忠馮の奥さんが直幸の娘鐸（タク）、鶴媛公であります。

この直幸の四男が真田の七代の養子に入ります。幸専公これが七代であります。このように見えますと、大名家のつながり方が婚姻と養子関係をバックに置いて幾重にも繋がっているということがよくわかると思います。

それからこの、大名家の交際、交遊のあり方を考える場合、先程の西田先生のお話でも、江戸城の、普通そういうふうには私たちが考えてきたんですが、江戸城の詰めの間、同じ間に詰めていて交遊が生じるというふうには、非常に単純に考えていたんですが、科研費による共同研究の中で歴史の専門家の視点により、福田千鶴さんに、新たな視点を教えていただきました。

福田さんは、国文学研究資料館にもおられて、東京都立大学・首都圏大学から、今は、九州産業大

学に移られたんですが、この福田さんが『大名の交遊—歴史学から—』ということで真田の史料を使って、諸大名との真田家の交遊を一覧表をにまとめていただきました。

これは我々にとって目から鱗だったんですけども、史料は『御両敬帳』あるいは『御両敬御留守居御名帳』の二点です。

両敬の関係、二つの大名家が共に尊敬し合う関係。それと、両敬に対して片敬というのがあるんです。片方だけが一方的に尊敬する。片方は尊敬されるままだそうです。それからもう一つはどちらからも通じない、不通。これは江戸城で会っても挨拶もしないそうです。恐ろしい因縁が過去にいくつも重なっていた場合に、そういう三つの形があるということを教えていただきました。ですから「両」と書いてあるのが、両敬の関係にあるということです。

これを見てもみますと、松平定信の白河家は文政年間に桑名へ移りますので、ここは桑名の松平というので、いっぱい両敬関係が出ていることがわかります。

島原との関係は124番目、表の1の2の所に、松平深溝家、肥前島原、七万石、帝鑑間、用、というのが出てまいります。これは両敬が前提でありまして、表の右下の注の最後の所に用と書いてあって、「表御用人御法札」であることがわかります。

00 : 26 : 39

これが先程ずっと、島原藩士で殿様と一緒に俳諧をしたり、真田家にお祝いの和歌や漢詩を贈っていた連中が、だいたい用人格だったことの意味がわかります。ですから、真田家とこの島原松平家の用人格レベルまでのお互いの尊敬し合う関係、そういう関係が成立していたと考えていいように思います。文芸の背景、点取俳諧の背景にこういうものを考えておかないと大間違いになると思います。不通ということを知らないままですと、大間違いを起こすことになるからです。本当に目から鱗で、歴史学の方から教えていただき有り難いことでございます。時間があまりありませんね。

〈司会 大丈夫です〉

あと何分。

〈司会 おまけして15分くらい〉 〈会場 笑い〉

はい。

じゃ、おまけもいただきまして15分くらいで、六枚目を見ていただきたいんですが、これは升来公と鶴媛公、二人の俳諧、二人が同時に出てまいります巻を、真田の俳諧資料から追いかけてみたものです。ですから斗来公も、升来公も出て来る。それから、升来公と鶴媛公が同時に出てくる。あるいは、鶴媛だけが出てくる。それらも含めて真田の資料を見ていきますと、百韻171巻に登場することになります。ですから、やっぱり多いと思います。

1から10、ここに斗来公が出てまいります。安永元年から安永三年という形で、斗来公が出てくるわけですが、この島原松平家は、実は、25年間宇都宮の殿様だったのです。寛文ぐらいに松平忠房が島原に入りますが、世継ぎの問題が起こりまして、寛延二年（1749）に宇都宮へ転封になります。そして、安永三年（1774）に再び島原へ戻るという大変面白い藩であります。大変な引越しをやらされた藩だったわけです。

00 : 30 : 19

注意したいのは寛延二年に宇都宮へ移っていることです。そうすると、寛延元年に宇都宮で俳諧をやっていたのは蕪村と重なることです。『宇都宮歳旦帖』を出していたのは寛延元年29歳の蕪村だったわけですが、寛延二年に宇都宮に忠恕のお父さんの忠祇が入っております。忠恕は宝暦から継ぎますが安永三年までは宇都宮におりますから、蕪村が宝暦元年に関東から京都に引き上げて行くまでの数年間、宇都宮で重なっていることになります。これは蕪村の動きが分りませんから確定はできませんが、4、5年間北関東を流浪していた蕪村と『宇都宮歳旦帖』を重ねてみますと、あるいはどこか

で接触があってもおかしくはない、そんなふうなことが考えられます。

宇都宮の松平家の資料がどこにどう残っているか。宇都宮の資料は蕪村にも繋がりがねないという可能性を持っておりますので、宇都宮の人は、ぜひ探してほしいと思います。

ところで、升来公と鶴媛公が同時に出て来ます一番若いのが11番の、享和二年（1802）の十二月であります。これは百韻に升来公と鶴媛公とが点をしている。ですから二人は連衆というよりは宗匠格の点者になって登場しているわけです。それから「持ち」、持とという記号が入っておりますが、これは宗匠に対する点料を支払う人という意味です。誰が誰の宗匠の点料を払うというわけで、升来公も鶴媛公も負担した、つまり、お金を出したということです。

それから、12番も二人が一緒に出ていることになりましたが、これは升来公のみがお金を出しています。そしてそこに「勝巻」、勝ちの巻（カチノマキ）と書いてあって、升来二巻、鶴媛一卷、菊貫二巻と書いてあります。これは抄出されておりますが、先程、西田先生がおっしゃった、ある宗匠に、最高点をもらったその巻は、その勝った人の所へ行きますから、二巻は升来公へ来た、鶴媛の所へは一卷が届いた。菊貫へは二巻だったということになります。

これで見ますと升来の方が上手だったということになります。あとへ続けて二つ星を探して行きますと、14番があります。この14番を見ますと、升来公はゼロでありまして、鶴媛公は四巻ですから、奥さんの方が上手ということになります。

16番の勝巻、これは升来公が五巻で鶴媛がゼロ。17、今度は升来ゼロ、鶴媛四。非常に激しいデッドヒートを繰り返していることになりました。

00 : 34 : 17

18、これが、升来六、鶴媛公一。19、これも升来三で鶴媛五、菊貫六となっております。こんなふうな形で二人が出てまいります。21も同じ調子ですが、22番の文化元年（1804）冬ですと、この句は「春も漸なご景色と、のふ月と梅 芭蕉」、とあります。これは発句を立句として持ってまいりまして、それにこの場合には、「余寒あつちわする、一瓢の飲」という句を付けております。百韻の表八句は、点取をやる場合には点の対象といたしませんので、発句は誰かの有名な句をもらってくるか、あるいは宗匠があらかじめ作っておく、あるいは執筆が作っておくという具合で、発句はだいたいあらかじめできているということになります。

それから「名残の裏」の八句もだいたい点取の対象といたしません。ですから、発句の立句が誰かということ、これは非常におもしろいわけでございます。大名俳諧、後で問題にいたしますが、点取だから競技であって点を競うわけだから、文学の精神性がないというようなことを、今までずっと俳諧史の研究者は言っております。そうすると蕪村が点取から始まったということはどう説明するか、非常に障ってくるわけですが、それは無視されている。ですからその辺は大名の点取俳諧に対する、ある意味での、偏見なんじゃないかなとも考えられます。

誰も読んでないのに、点取だから、競技だから、っていうことですね。点取の点の意味が、冗談でいえば「てんでわかっていない」と。日本文学の評は点なんですよ。平安から和歌で評をするのは点ですよ。長点っていうのは良い点ですからね。点取の点は点数って読み替えるのと、良い悪い、良くできたっていうのと両方あるわけで、大名はどうもちょっと違う、点数だけではないのではないかっていうのが僕を感じですね。

それから、24へいきますと、この発句も「春もや、けしき整う月と梅」ですが、これも芭蕉の句を持って来ています。「霞汲つ、韻探る友」が脇の句であるわけですが、非常に脇句の調子が高い。詩的な世界を意識して作られているような気がいたします。

00 : 37 : 36

升来、鶴媛、この二人の勝巻、それこそ点取の勝ち負けですが、前半25までは升来公は43巻勝ち、

鶴媛公は25巻勝っていて、菊貫公が57です。菊貫が一番で升来が二番で鶴媛公が三番です。ところが26を過ぎて、27から77まで後半部へ入ってまいりますと、これ鶴媛さんが54巻、升来公が22巻、まったく逆転してまいります。

鶴媛さんが本気になったっていう感じで、非常に楽しゅうございます。だけど、菊貫さんはもうひとつ上手で、後半に入っても70巻勝っていますから、やっぱり菊貫さんはそうとう実力があったということだと思います。

それからもう少し、鶴媛公だけが出るのがあるんですね。鶴媛さんだけが出るのが一つ星なんです、13から始まります。13は鶴媛さんは点者として出ておりまして、白日公、菊貫さんも連衆として出ているんですが、何と菊貫の作品はとっておりません。それから31番目のこれ、点だけを鶴媛さんがしているんですが、これも菊貫をとってないですね。叔父さんをバカにしている、あるいは公平に吟味して、宗匠としてですね。

ところが44にいきますと、今度は連衆の一人として出ています。菊貫公も連衆として出ていまして同席しています。点はとれないままですね。それから45番にいきますと、この場合の勝巻は鶴媛が3巻で菊貫が4巻。そして、催主ですが、これは先程、西田先生もお話されました細川邸の春秋館です。陸州は、旗本です。晩年の菊貫の元で、一番親しかった人です。追善集にも名前が出てくる。そこへ菊貫と鶴媛公が出かけて行っていることがわかります。これはどういうことだろうと考えるんですが、おそらく御主人の升来公が参勤交代で島原へ行っているんだらうと思うんですね。で、一人の時は菊貫といっしょに一人の俳諧宗匠として、あるいは俳諧の作者として春秋館へ出掛けて行っているということがわかります。

46は、これは催主から見ますと、菊貫公の所へでかけている。島原の江戸の藩邸から菊貫の、松代藩の藩邸に出かけて行っているということがわかります。46、47、48、49、50、51、52、53、54、55と一つ星がずっと続きますが、56から、57、58、59、60……64までずっと一つ星が続いてまいります、だいたい出かけているのが陸州の春秋館と白日楼、すなわち、松代の菊貫公の屋敷へ一人で出かけているという事になります。もちろん侍女だとかのお供を連れて行列を作って行くわけでしょうが。

ここで僕が一番おもしろいのは、俳諧の場に置ける女性が身分的に自由であるということですね。作者としてあるいは点者として一切、男女の身分に関わらない付け方、あるいは作り方、参加の仕方、そういうことができていたことが、この一覧表を見ていると非常に良くわかるのではないかと思います。

それから、最後ですが、この78巻の中で11以降の星の付いていないのが、升来公であります、だいたい升来さんは白日公と必ずと言っていい程、一緒に出ている事がわかります。六枚目の下の段の20番を見てもらえるとわかるのですが、「今日ばかり人も年寄れはつ時雨」も芭蕉句で、これもやっぱり芭蕉発句を立句にしていることがわかります。

00:44:44

それから28番、七枚目の上段、文化三年、これは蜻蛉と書きましたが、蜻蛉が正しい。蛉じゃなくて蜓ですね。虫篇に延べるといふ、これ間違い、「蜻蛉や取りつき兼ねし草のうへ」です。これも元禄二年の芭蕉の句を立句にしているという事がわかります。それから35にとんでもらいますと、俳諧之連歌「兎も角もならてや雪の枯尾花」。これも芭蕉の発句であります。それから、先へまいりまして、57ですね。57は鶴媛さん一人が出掛けた時ですが、「二日にもぬかりはせしな花の春」これも芭蕉であります。結構、芭蕉句を立句にこの三人は百韻を巻いているということが分ります。

そうしますと、先程ちょっと申しました大名俳諧の意味ということ。どう考えたら良いのかという非常に大きな問題になるのではないかと思います。後で、今の僕の問題から発言したいと思います。

司会

それでは井上先生のお話はここで終わりにさせていただきたいと思います。連句をよむ会の方たちにとってもなじみのある句、連句を読む会の方ではちょうど井上先生がEの所でお示し下さっています。最初の、安永元年の句を百韻から読み始めていて、「根を分ける菌の誉れや白牡丹」といった発句が耳にまだ新しいところがございます。点取俳諧というのが単なる競技ではなくてやはり文学の精神性を伴った、また藩の要人たち、藩政の実働者たちであり、教養人たちが関わる、重要な日本文学の水脈に属するものだという御提言をいただきまして、非常に嬉しく思います。

それではちょっと席をご用意いたしますので、井上先生、そのままそちらにいらしていただいて、西田先生、それから小幡さん、玉城先生、どうぞ前の方にいらしていただけますでしょうか。よろしくお祈りします。

00 : 49 : 03

司会

何の打ち合わせもしておりませんが、これから『大名俳諧と真田幸弘の俳諧』ということで井上先生、西田先生、それから実際に幸弘の俳諧を読んでいるお立場から小幡さんということで、ざっくばらんにいろいろ井上先生はじめ、御意見をいただきながら小幡さんにも幸弘公の俳諧のようすをお知らせ頂きながら、ということで、このシンポジウムに関しましては、司会を玉城先生にお願いするということでしたよね。よろしいでしょうか。はい。ではお祈りします。

玉城

確認事項で申し上げておかなければいけなかったことをいまさら思い出しました。幸弘さんの俳号が白日庵菊貫でございます。ですから、もしかしたら井上先生や西田先生のお話の時、白日とか菊貫さんとかいろいろ出て来て混乱されていたかもしれません。

私がいけなかったと反省しております。幸弘公には、象麿、あるいは攀月楼などという号もありますけれども、白日公、あるいは白日庵、菊貫は、すべて幸弘さんの俳諧の号でございます。この号で統一して、お話を最初に私の方で申し上げておけば、混乱は少なかったかなあと反省しております。どうも申し訳ございませんでした。

なお、菊貫さんをキクヌキさん、キツカンさんという呼び方もあるそうですけれども、キクツラがよろしいようです。この号で統一して話を進めさせていただきたいと思います。よろしくお祈りします。ここまで大名の点取俳諧が、両敬関係や縁戚関係にある江戸藩邸でどういうふうになされていたか、つまり、どのような場で、いつなされていたかという実態に即したお話をお聞きしました。

このことを踏まえた上で、最後に井上先生から、実は点取俳諧でも芭蕉の発句が、立句となっていること、立句というのは、連句を巻く時の最初の句（発句）ですけれども、芭蕉の句が多く採られているんだという具体的な用例をお話いただきました。

それがどういう意味を持っているのか、井上先生、どのような見通しをお持ちかお祈りがいささせていただきます。このあたり、いかがでしょうか。

00 : 52 : 29

井上

先程の続きになりますが、大名俳諧をどういうふう考えるか、大名俳諧にどういうふうな意味があるか、というのが大変大きな、基本的な問題だと思うんです。

実は俳諧史の専門の中で、点取俳諧、点取という名がついた故に雑俳の中に入れ込められてしまっ、長屋の熊さん八つあんあたりの、賭け事の点取みみたいなイメージが、大名俳諧にも今もくつつ

いてあるんだと思うんですよ。しかし、先程申しましたように、日本文学の中の点ということを考えますと、点は批評でありますから、数というように翻訳するということはあるいは間違いかもしれない。

だから、例えばこれ、蕪村の連句、蕪村は芭蕉なんかには比べますと連句はぐっと少なくなりますね。発句の方は芭蕉に比べると三倍くらいの、2800くらいの発句があります。一茶になりますと万がついてまいりますから。時代はだんだん発句中心になってまいります。一茶はまた、連句は少なくなると思います。

しかし、蕪村あたりが出発したのが江戸座の点取俳諧であるということは、今度出ました『蕪村全集』の第二巻の連句を見ていただきますと、冒頭から三つくらいが、ちょうど先程西田先生が示してくれました、あのかたちのものが蕪村全集の最初に出てまいります。

そうすると、この蕪村の最初の、ですから関東時代ですね、江戸座に属していた。それを、蕪村俳諧の研究者が、どう処理しているか、気になってきます。

これ、申し訳ないんですが名前を出しますが、蕪村俳諧の研究という今はトップをいっている清登さんの本ですが、「その興味の中心は点の高低にあるので連衆の精神的な交流は希薄だ」と。で「蕪村一座の連句から一応除外する」と書いてある。ちょっとこれはね、困ったなと思うんです。それから例えば『俳諧鱗・一枝笠評釈』という本を、綿谷雪さんが出されているんですが、その綿谷さんの従来の評ですと「俳諧史上まったく意義のない空しい存在」と書いてある。「一顧の価値をさえ認められない程の低俗化」と書いてありますが、これはどうしても納得がいかない。先程言いましたように、大名俳諧の中の芭蕉の句を採ったからといいましたが、脇句のレベルがいいということもちょっと言いました。それから、西田さんとともに重賢公の句を翻字しておりましたけれども、二人でよく「難しいな」というのに会いまして、典拠に漢籍からのものが多い、博物学のものが多い、それから『五子稿』が多かった記憶があります。『元禄名家句集』からのものとか芭蕉以外の五人の有名な元禄の俳人がおりますね。その人たちの句を、其角もそうですね、嵐雪もですね、そういう蕪門の連衆から元禄の五人の俳人を含めた先人たちの発句を立句にしたものがかなり目に付いたように思います。ですから、そうしますともう少し、従来のこういう「除外する」というようなことはとにかくもう止めよというのが僕の一つの提言です。

00 : 57 : 11

ところで、講談社の『蕪村全集』の連句編をまとめられました丸山一彦氏は、蕪村の俳諧は江戸座の存義側の俳人との親交から始まっている。存義というのは先程の重賢公の俳諧の指導者であります。だから、蕪村の句、あるいは付合の中には江戸座の吟調なり、江戸座風の付合というのが非常に若い頃は濃厚であると述べておられます。それから蕉風復興の中で芭蕉風へいきますが、やはり晩年はまた蕪村は闊達な其角調の、そういう江戸座風のものにやはり引かれている、という事を、全集の解説の中で丸山さんが述べておられます。ということになると、我々の方がどうも今まで雑俳の中で、点という事で、点を何でもかんでも同じものにして、大名俳諧も低俗で問題にならないものだと一緒くたにしていたんじゃないかなあと。じゃあ、ちょっと分けてみてはどうか。そういう事を少し大名俳諧をやる時に、考えるのが重要かなという感じがいたします。

そうしますと、我々は何をまずやるべきかといいますと、先程サンプルとして島原藩の『藩士明細帳』で、作品を作っている連衆の知的レベルの検証として『藩士明細帳』からちょっと並べてみたわけですが、このように考えて参りますと、真田家には膨大な記録類があるわけですから、島原以上のデータが期待できると思います。私も2~3データ写真を撮りましたが、3年間の研究ではまったく手が付きませんでした。それぐらい詳しい藩史の記録があります。藩の重要な連衆というのは学問を良くしていて教養が高いですから、漢詩もできれば、和歌もできれば、俳諧もできる。その証拠に、

真田家の幸弘公の四十の賀、五十の賀、六十の賀、七十の賀というのを見ていきますと、六十の賀くらいから俄然松平定信やその一族、一統が顔を出しまして、江戸の橘千蔭あたりも顔を出し、それから京都の貴族たちも、顔を出します。また儒者が顔を出してまいります。ですから、非常に教養が高いということをやっぱり大名の場合には考えていなければいけないんじゃないかと思えます。

それからもう一つの問題は「月並」という言葉です。月並俳諧、月並俳句といものを近代は毛嫌いしてきました。これはおかしい。月並というのは月々集って訓練するということですから、非常に良いことなんです。連歌の月並の会というのは非常な緊張の元にやった。私は現今の研究者が、近代が否定した月並から江戸時代の月並を見ているから悪いことになる。ではなくて、前から見る、つまり連歌の月並から見て、大名の点取俳諧の月並ということを考えますと、これはものすごい鍛錬の場になっていたといえるのではないかと思います。そういう発想があつて、良いのじゃないか、ということの一つを考えていただきたい。

01 : 01 : 42

それから、高点句集、これは『誹諧鰯』に象徴されますが、あまりにも膨大であるために、あるというだけで中味の検討はされたようで、一切されていない。これはなぜできないか。作者がわからない。百韻から付け合いのいいのを抜いただけです。そして、宗匠たちが年間でいいのものを10なり20なりを自分の年間の付け合いの良いものとして寄せたわけですね。

『誹諧鰯』が何十年と続きますから、点取俳諧高点句集ということで注目されているんです。しかし、当時の俳書を見ますと、高点集というのは無数にあります。各宗匠ごとに、各班ごとに、無数の高点句集というのが出されていますが、みんな作者が分らない。しかしこれ、宗匠たちには分っているわけです。おそらく僕は大名や有名人たちが目白押しだと思います。そういう人を俳諧のところへ出していくのをはばかったのではないかなあという気がする。

で、そこを暴くこと。この付け合いは菊貫公だ、白日公だと、そういうのを白日の下にさらす〈会場 笑い〉わけですね。こうやってくると何か変わって来るだろうと。それを次世代のコンピューター、パソコンを駆使できる若い研究者たちに本当に期待しているわけです。

松代や熊本、いろんなところに分らないものがいっぱい残っているはずで。そういう百韻の中のこの二句付けがここへ引かれているという、そういう事が分って初めて俳諧が意味を持つ、高点句集も意味を持つ。そういう研究が待っているのではないかと、こういうことが考えられますね。

では、なぜそういうことしつこく今言うかといいますと、実は前号の岩波の『文学』の座談会の中で、連歌をやっている廣木一人さんという、青山学院の今の連歌研究者のバリバリであります。彼が座談会の中で、ですね、俳諧の連歌を連歌で考えると、連歌と言えれば共同制作の連歌として中世から繋がっているとすれば、俳諧の連歌は芭蕉で終わっているのではないか、後は形骸化して何もないのではないかと発言されている。つまり、蕪村の点取俳諧も含めて存在の意味がない、だから俳諧史を書き換えなさいとおっしゃっている。

01 : 04 : 53

僕は、一概に廣木さんの発言を信じることはできません。この大名俳諧を、特にそれは江戸座に繋がりますが、江戸座の三都における連句の生産量というのをいっぺん考えてみる必要があるだろうと思えます。それは何よりも、真田九万句という量であります。細川が二万七千句〈会場 笑い〉。これらは生涯作品の何分の一なんです。それを考えていきますと、町方でも村方でも好きな人はそういうのを作っているわけですから、連句というのとはなくなるはずがない。連歌というのはそもそも封建時代の文学であったには違いない。暇を持って余した武士が寄り合うわけですね。寄人、寄方、寄合、もうそれは侍そのものなんです。時間を持って余した侍が、寄り合うわけですね。ただお互いの心が知れていないと、いざ出陣という時にですね、あいつは槍が得意、弓が得意、そういう事ちゃんと

分っておらないと「おい、お前、槍で突け」と言ってもうまくいかないわけですね。とことん相手を知った寄合、付き合いをしておかないといけない。その事のためには連歌が一番いいですよ。

そうすると精神の奥まで知るわけです。連歌っていうのは、封建時代の、侍社会の、武家社会の文学ということでやっぱり考えた方がいいんじゃないか。近代で切り捨てられるのは当然です。武家社会が終わったんですから。説明もしやすくなる。そんなふうな感じがして、大名俳諧の意味を考えますと、実に大きな俳諧史の問題、あるいは文学史の問題にそのまま繋がっているように思います。

ちょっと大風呂敷、大ボラかもしれませんが、そういう事をこの場を借りてしゃべらせてもらって、何やら胸がすっきりしました〈会場 笑い〉。申し訳ございません。いろいろありがとうございました。文句を言われると思いますが。

01 : 07 : 15

玉城

俯瞰的というか鳥瞰的に、大きく見ていただいて、点取の問題、それから月並の問題、大名の交流の問題、おそらく文芸から政治の季節に変わっていくだろうという見通し、それから連歌時代の終焉、それから発句主義。いろんな本当に大きな問題を、短時間で本当に申し訳ない時間の中でお話しいただきました。では西田先生、今のお話しに付け加えることを含めて、今、どんなことをお考えでしょうか。

西田

私はあまり何も考えないで、井上さんが今言われたことは、本当に、ずいぶん聞かされてね〈会場 笑い〉、でしょ。どう対応したのかももう忘れてしまいましたが、結局ね、上野洋三さんがね、大名俳諧は、カミオカンデってあったでしょ、ノーベル賞をもらったね、これ俳諧研究のカミオカンデだなんて、ずいぶん応援してくれていたんですけど、彼はその後どうしたのかね〈会場 笑い〉。応援してくれないんですよ。ただ私は評価っていうのは、句を一句一句見るしかないと思うんですよ、それは。そうすると非常に変な句もあるし、さっき井上さんが仰ったように、博物学的な、大名の好みの、例えば私が印象深いのはどびろくってという言葉が細川俳諧に結構出てくるんですね。今のどぶろくですけどね、当時はどびろくって言っていた。そういう類いの単語のレベルでもあります。ただやっぱりね、そういう意味では、一句一句これから吟味していったらね、やるしか評価は出ないんじゃないかなと。このエネルギーはすごいと思いますし、今、政治の季節になって、近代になって、ということですけど。ま、今の政治家は連句をやっても、いいんじゃないですかね、派閥でね〈会場 笑い〉。派閥を超えてね。そうすればいいんじゃないかと思う。もしかしたら密かにやっているかもしれない。

玉城

ねじれ解消〈会場 笑い〉。

西田

そういう意味でね、レベルが高いっていうのはその通りだと思います。私、先程のプリントで申し上げなかったのは、細川重賢は漢詩人というので、私、プリントには書いた。その説明をしておりますけど、その漢詩をやっている仲間がね、細川重賢は若い頃から俳句をやっているんですけどね、先程申し上げたように部屋住みの長い人ですからね。ただ、最初は漢詩なんですよ。ところが仲間の連中がどんどんどんどん死んでいくんです。それ先程のプリントに書いたんですね。ですから、安永期に入るとやたら俳諧にのめり込む。ですから相補関係にあるのかな。つまり文芸というものの相補関係があるので、ですから俳諧は重賢の場合は漢詩と同じ位置、立場にあったんじゃないかと。

ですから、結構一所懸命ね、俳諧に打ち込んでいたんじゃないかと思うんですね。で、ナンピという南に飛ぶという人は、谷口鶏口の名跡を継ぐんですね。これ、私調べて書いた事あるんですけど、

それで熊本には谷口鶏口の一派が近代になってからもずっと栄えるという。そういうケースも、ありますので、何かあの、大名俳諧といえども、これまでの評価とは違う見方をしなきゃいけないっていうのは、私も思いますけどね。

玉城

井上先生、西田先生のお話はともに、ちゃんと句を読もう、それから点取の意味、月並の意味、交遊の意味も考えようという御趣旨であったと思います。

西田

そうですね。

玉城

ありがとうございます。そこで、小幡さん、資料を用意していただきましたので、これ、皆さんにもお配りしてありますのでご覧いただきますようお願いいたします。五百韻は、百韻が五巻ということになります。句数にして五百句、これは真田連句九万句にすれば、大変少のうございます。しかし、小幡さんは、発句も付句もきちんと読もうという姿勢で読まれたものです。小幡さんの方から、資料に基づいてお話しいただきたいんですが…。

小幡

はい。よろしいですか。

玉城

お願いします。

小幡

私が、こんな所に座ってお二人の先生方と並んでお話しするなんて、本当におこがましいことです。今のお二人の先生方のお話し聞いても、正直言ってよく分かりません。しかし、私たちは、玉城先生がいわれたように、我が町の殿様の俳句が読みたい、そして読む事が非常に喜びである、ということをお願いしたのです。殿様はいったいどんな句を読んでいたのかということ。その殿様の句を読もうということから始めたわけですし、まだまだ、昨年始めたばかりですから、「読む会」で読んだのは、全部で五百句位しかないのです。

その後、6月にこのフォーラムについてのお話しがあったものから、もう少し読んで、菊貫さんの句はこういう句だということをお話ししてはどうかと言われ、それではと、宝物館で2、3千句、画像をコピーして頂きました。それを家で毎日毎日、画像を見ながら読んでみたわけですが、もちろん分からない句もかなりありました。それを仲間の良く読める先生にうかがったりして、だんだん埋めていって、最後には四つ、五つ分からない句が残りました。それを玉城先生にお忙しい所を、メールでやり取りして、教えて頂いてまとめたのがこの資料です。

ですからこの資料は、百韻が十巻分の最初の部分で、全部で1000句中の菊貫さんの詠んだ句が全部入っています。連句というものは前の句・長句と、それに続けて詠んだ付句・短句がセットとなって、連続してつながっていきます。その各々の句の関連を、付け合いと言うのだそうですが、その付け合いには「句い」とか「響き」「移り」とかいうものがあり、それが分からないと連句の本当のおもしろさは分からないと、玉城先生は言っておられます。

しかし、私自身は菊貫の句を読みたいということだけで読み始めてみたので、その前の句を読んでそれとの兼ね合い、付け合いということは素人でまだ分かりません。ほとんど分からないのです。しかし、それは置いておいて、菊貫さんがどういう句を詠まれたのかということをもとめてみたということです。ちょっと5分くらいよろしいですか。

玉城

どうぞ、どうぞ。

小幡

そういうことで皆様に二枚差し上げたプリント資料は、各々の句の下に、1の2とか、1の4とか出ていますが、これは1巻の2ページ、または4ページということです。その巻は、二枚目の最後のところに、井上先生たちがまとめられた報告書というのが書かれています。第1部と第2部があって、1部は論文集です。1部には、連句について菊貫さんがどういう句を詠んだとか、あるいは縁戚関係だとか、そういうことが実に詳しく書いてあって、私はしっかり読ませていただき、勉強しました。

そして、2部に菊貫の、先ほど先生が九万句と言われましたが、九万句の連句の全目録が掲載されています。連句の解説は百韻の最初の1句（発句）のみ記されています。あれは本当に膨大なものですが、その一番最初から「読む会」で、読み始めたのです。そして、1巻は8ページあります。その8ページのうちの2ページの中に、菊貫さんのこの句が載っているという意味です。ですから10-8は、最後の方の、十巻の8ページに、この句が載っているということです。

01:16:52

結局これは、千句中の菊貫さんの句が、最後にまとめてありますけれど、五七五の長句が81句、長句の後ろへ付けられた七七の短句が27句あります。しかも最初はほぼ殿様の句で始まっています。これはやはり、殿様が重要視されていて、最初に詠むように言われたのかもしれない。

そして、番号の付いていない平とかフとか雨とか、最初の方は伴水とか岡とか李っていう字がありますけれども、これは連句の作者名で、詠んだ方や宗匠さんたち連衆のお名前です。

そういうことで、一巻が百句ありますから千句の中の菊貫さんの句が全部で百八句です。百韻の中で大体一割くらいが殿様の句だと思っていただければいいかと思います。初めての方、一般の方もいらっしゃるのでもっと説明させていただきました。

そこで、この連句集の中でどういう内容の句を詠んだのかと思ひまして、歳時記などでのように分類をしてみました。それがもう一枚の方です。ですから、このもう一枚の方は、菊貫さんの108句が私がここで全部読んでいて、とても時間がかかるので、特徴的な、分りやすいと思われる句だけを、拾い上げてまとめてみたものです。

それを分類する場合に「自然と、自然の移り変わりの美しさ」だとか、あるいは「天文、時候、地理、季節」だとか、あるいは「生涯の生活とか行事の一コマを詠んだ句」とか、そういうふうに分類してみて、全部で二十句ほど抜き出して、まとめてみたものです。ですから、これをお読みくださると「ああ、菊貫さんという方はこういう句を詠んだのだな」ということがお分かりになり、非常に人間味あふれた楽しい句や、ユーモアにあふれた句があることを、お分り頂けると思います。

01:09:34

さて、文字通り菊貫さんの生きた時代というのは、今から二百四、五十年前なんですね。宝暦の改革ということよく言われますけれど、恩田壱を登用した方で、文字通りこの人は宝暦2年に12、3歳で殿様になり、それから明和、安永、天明、寛政、享和、文化の時代をずっと生きられ、文化12年、今からちょうど200年くらい前に、亡くなられた方です。菊貫さんのことについては、先ほど最初に玉城先生から詳しい説明がありましたので省略させていただきますけれど、そういう方です。

これも全部、さっき申し上げたように、仲間を読んだものだから、全部私が読んでいてなど申し上げられないのですが、そういう句です。そして、これを先生に印刷していただいたのですが、実は私、二日、三日前に先生にこういう漠然とした二百句以上を、短時間では説明できないから、私が五分くらいで特徴的な句だけ話すメモを差上げたのです。そうしましたらそのメモをご覧になって「あ、この方が資料としては役立つから、これでどうですか」と言われたのです。私はここで報告するメモとして、これを作ったものですが、せっかく印刷していただきましたので、これをとびとび

やって5分くらいでお話しできればと思っています。

例えば「自然と、自然の移り変わりの美しさ」と言いますと、4番目に「川より暮る両国の夏」これは付け句として詠まれた句ですね。それから10番も「芥にも秋の哀れや佃しま」。

こんなのが本当に江戸の夏と秋を、実に簡潔に分りやすく述べられた句のような気がします。

本当に二百三、四十年前の江戸、特に両国なんていうと隅田川の淵、それから佃島っていうのは、今は全く変わっているそうですけれども、かつては隅田川の河口にあった所だそうですね。そういう所の、今から想像もできないのですが、河から暮れるっていうのが、実に上手いと申しますか、簡潔でありながら江戸の夏の夕暮れの景色が、詠まれているのではないかと感じます。それから「秋の哀れや佃しま」という所も、隅田川を通して色々な物が流れて来るのではないかと思うんですね。そういう流れてきた物の中に秋の哀れを感じるということで、本当に菊貫さんは、私たち一般庶民以上に、庶民的な感受性があったのではないかと、感じたわけです。

それから「自然界の美しさ」で、霞を詠った句が多い気がします、「霞から生まるゝような塔大工」。塔を作っている大工さんを詠んだ句で、江戸にはかつては沢山のお寺もあったし、五重塔もいくつか建っていたようで、今考えると墨絵のような、今ではとても見られないような風景が目に浮かびます。

01 : 23 : 52

それから、その次の「鞠壺ッさかし出さるゝ寺の秋」。本当に優雅なこととしていたと思うのですが、このように藩邸で句会を催した時には、きっと句会ばかりではなくて、その前にお茶の席を設けたり、あるいは蹴鞠をして遊ばれたんだそうですね。そういう事が先生方の論文の中に書いてあります。そういう事を考えるとやはり殿様たちがこういうことをして、連句を詠んで、そして最後には宴会を催して夜中にお帰りになった時の風景が、何となくイメージとして湧いて来るような気がします。

それから「天文、時候、地理、季節」ですけれども、これも雨の句が多い気がします。雨はもちろん梅雨ですが、これも176番にある「寝て見ても寝て見ても降梅の雨」。梅の雨とはもちろん今の「梅雨（つゆ）」のことです。それから、語句の繰り返しを実に効いていて、毎日毎日の長梅雨の雰囲気が出ています。それからきれいな句は「おやみなき雨の葵の咲出して」。こんな句も、葵の花が咲き始めると梅雨に入り、そしてだんだん上の方まで咲いていって、一番てっぺんが咲き終わると、梅雨が明けると言うことを昔よく人から聞いたものです。そんな情景が読み取れます。

それから、冬はやはり雪の句が多いと思いました。「厠ながらも雪の曙」。雪が降り朝起きてみますと、昨日とは全く違った、別世界が出現するわけですね。そうすると、普段はボロな厠も全く変わった風情を醸し出すわけです。そういう日本の原風景みたいなものを感じます。

それから「又降雪に青く成ル松」。これも雪が降って辺り一面真っ白になりますと、松だけがいよいよ青さを増すわけです。そういう感じというのは、私、俳句などほとんど知らなかったのですが、こういうもの読んでみますと、ああ、なるほど、そういうもんだなと感じるのです。

01 : 27 : 01

それから、「帰る雁一声宛に遠霞」。この句も、今ではとても、ビルに囲まれた都会では見られませんが、二百三、四十年前の江戸には、やはりこういう風情が、豊かな自然があったのではないかと、想像できます。

その他、地理といいますか、色々な場所で詠んだ句が、最初の千句でも出てきます。琵琶湖周辺、例えば二番目の「辛崎の松にこぼるゝ比叡の鐘」。これも、芭蕉の近江八景ですか、その中の句を借りたものだとは先生から伺いましたが、そういうものにしても、やはり琵琶湖周辺でお詠みになったと思われる。その他、長崎から手紙が届くという句で、長崎が出てきますけれども、松島とか嵯峨、

須磨、大原、京都周辺ですね。こういう地名の入った句が、実際に自分がそこにいたかのごとく出てきます。そうすると、菊貫という人は殿様ですから、江戸と地元の参勤交代で一年おきに松代へ帰って来るくらいで、そんなにあちこち出歩いたり旅を楽しむわけがないのではと、疑問が出てくるのです。結局これはひょっとすれば想像かもしれない、フィクションの世界かもしれないと言われる方もいらっしゃるわけです。そんなことも先生方に、ぜひ今日はお話しただければと思ってお聞きするわけですが、そういう句がいっぱいあります。

01 : 28 : 59

それから、江戸の中では佃島とか田町、両国、巢鴨、谷中、根岸、吉原など、こういう所が頻繁に出てまいります。私たちはほとんど、大正、昭和の人間ですから、もちろん先ほどから申し上げている昔の、二百年前の江戸というのはどういう状態だったのか想像もつかないわけです。しかし、仲間の中に東京のことを詳しく知っておられる先輩の方がいらっしゃるって、谷中ってというのはこういう所だよ、巢鴨ってというのは昔はこういう所だったよ、ということをお話して頂くと、我々は納得できるわけですね。そういうところが大名俳句を仲間と一緒に読む楽しさ、素晴らしさだと思っています。

それから、今はほとんどなくなってしまったような、江戸時代の生活行事が出てまいります。自然を見て楽しむことが多かったようで、梅見、蓮見、菊見、紅葉など。それから行事とすれば煤払、虫干、井戸替。こういうことを題材にした句がたくさん出て来ます。非常に素直で分かりやすいものです。こういう句が出て来ますと、皆んな非常に安心して「あゝ、愉快だな、懐かしいな」と思われるようです。「梅咲て畠へ通フ煙草盆」「蓮咲庵に絶へぬ献立」。やはり花見には宴会を催したみたいです。それから「菊咲て又出る庵の涼台」。当時、江戸は本当に暑かったみたいです。蚊もいっぱい出て来ます。夏の夕方は涼み台を出して、涼んだと思われ、秋になってこのように菊の季節になり、あるいは月見の宴をやりますね。お月様が非常に多く出て来ますが、お月見の時にもまた涼み台を出して、月を愛でることになります。

それから暮の煤払いも何度か出て来ますが、「失せものゝふしきに出たる煤払ひ」。本当にこういうことがあり得るような気がして、思わず笑ってしまいます。それから土用の虫干し、私たちが子どもの頃は虫干しをやったものですから、つい懐かしくて選んだのですが「帯ほと道を明る虫干」もそうです。こういうのを読むと昔がよみがえってくるような気がします。

その他、今ではほとんどなくなってしまった井戸替えとか、これは今でもやっていますが、相撲・囲碁・将棋、こういうことを題材にした句が次々と出て来ます。

玉城

すみません。大変おもしろいお話をおうかがいしている途中で、ちょっと中断していただくというのは本当に野暮な話で、いつまでもこうしてお聞きしたいんですが、5時には確実に会場を元に戻さないといけないという〈会場 笑い〉制約があり、その後懇親会を予定しております。それで、懇親会にも参加していただければ、小幡さんにお話をおうかがいできると思いますので、この話も含めて、懇親会で…と存じます。誠にすみません。

一句ずつ味わって読むということの大事さ、読んでいる楽しさっていうのは、今のお話で十分皆さん伝わったんじゃないかと思えます。これから後も全部お聞きしたい所ですけども、最後に、あと5分で、遠来のお二人の先生、西田先生、井上先生から、皆さんいらっしゃるこの席で、これからの我々は、どういうふうな研究していけばいいのか、先程もサジェスチョン、示唆していただきましたけれども、最後に締めとして、西田先生、井上先生、一言ずつおうかがいしたいんですけど、どうぞよろしくお願ひいたします。シンポジウムにならなくてすみませんでした。

01 : 33 : 49

井上

大変すばらしい組織、地域を含めて、玉城さん中心になさっていること、本当に嬉しく思います。強力な指導があって、読みが着実に進んでいることですね。それともう一つは、積極的に学会レベルでの若い人たちに、翻刻、翻字作業に積極的に参加していただけないだろうかというのが、一番の願いです。

一番力がつくこと、勉強になるのは翻字すること。翻字するっていうのは読むことですから、一年間に若い人は二千や三千は軽く読めます。穴ぼこで読めばいいですから。どんどん穴ぼこで読むと二千や三千は軽く読めるんですね。それを10人ぐらいのグループができれば、非常に明るい未来があるという感じがします。

玉城

ありがとうございます。

井上

今日は遠い所からたくさん若い方が見えていることを知りまして、そういうことをぜひ、訴えていきたいと思いました。

平林さん、玉城さんが中核としてがっちり固めていただいておりますので、どうぞよろしくお願いたします。それから、真田宝物館の方へお願いは、先程言いました袋だとか包〈会場 笑い〉だとか、そういう物が、あるいは長持の底に何袋かあるはずでありますので、どうぞ、その方の探索もよろしくお願いたします。

西田

最初に申しましたように、今井上さんも仰っていただきましたけれど、こういうかたちで作業を共同して、たくさんの方が作業に携わって下さることによって、それがそのうち真田だけではなくて真田以外にも広がっていくという可能性があるわけです。大名全部またがっていますので。そうすると大げさではなくて、例えば昔、柳田国男が共同研究会作って、全国に自分の意図を体現した人たちを養成し、そしてそこからセンターみたいなもの自分でやった。

それから大蔵経、まったく違う話ですけどお経のね、鉄眼が大蔵経つくりますよね。その時にね、お金を出すんです。つまり、お金がかかりますから勧進をして、お金を出した人の名前も載っているんですよ。そして、それはもう公刊されていて、具体的な名前が出てくるわけです。そういうのをなんかでつかえないかなあと私は思って、これにちょっとね、近い性格、中身もそうだし、一円寄付するつもりで、作業に参加していく。そして、全体に広がっていくというね、これ、絶好の機会です。我々細川やりましたけれど、三人でね、寂しくね〈会場 笑い〉、ワープロがね、その頃あったんですけど誰も使えないしね。この作業、本当にワープロが絶好の手段なんですね。ですからそういう意味でね、私は本当に今日の第一歩、嬉しく思っています。

玉城

長時間に渡りまして大変貴重な話、また今後に繋がる話をいただきました。ありがとうございます。それから今日、貴重な時間を割いていただきまして、ご出席いただきました会場の方、ありがとうございます。だいたい顔見知りの方です、私にとっては〈会場 笑い〉。

しかし、今日、この大事な場に一座することができましたこと、なによりものことで、厚く御礼申し上げます。俳諧は場の文芸です。座をともにすることが大事でございます。そこで、一緒にやるのが連衆でございます。「お付き合いいただきまして」というのは、付合をいう俳諧の言葉です。改めて御礼申し上げます。お付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。

〈一同 拍手〉

平林（司会）

四人の皆さん、どうもありがとうございました。今日はまさに日本津々浦々から集って下さった皆さんと、それから長野市松代を繋ぐ文化と言いますか、知のネットワーク、そして井上先生の御提言を聞いておりますと俳諧史が塗り替えられる、文学史が塗り替えられる、その一步の瞬間に私たちここに60人ほどではありますけれども会す、まあ幸せと言いますか興奮、そういったものに立ち会うことができたことを大変嬉しく思います。

玉城先生はずっとこのシンポジウムうまくいかどうか、特に井上先生と西田先生がそれぞれ佐賀と奈良からここへたどり着けるかどうか〈会場 笑い〉、最大の懸案事項であったわけですが、本当に朝、おそらく早く起きて、西田先生、夕べはほとんど眠れていないというお話ですが、遠路はるばる来ていただきまして、長野、真田モデルというんでしょうか、研究の真田モデル、今、翻刻チームは小幡さんも入れて12名、初年度一万句を読む予定で今計画しております。

そういう楽しく恐ろしい話はホテル信濃路でさせていただきたいと思います〈会場 笑い〉。本日は暑い中、この部屋も大変熱い興奮に包まれていたように思いますけれども、松代藩第六代藩主真田幸弘公の俳諧活動に関するシンポジウムに参加していただきありがとうございました。これで閉会の辞とさせていただきます。〈一同 拍手〉

真田フォーラム2010実施 趣旨

☆本フォーラムは、「文の真田」の実態に迫ります。

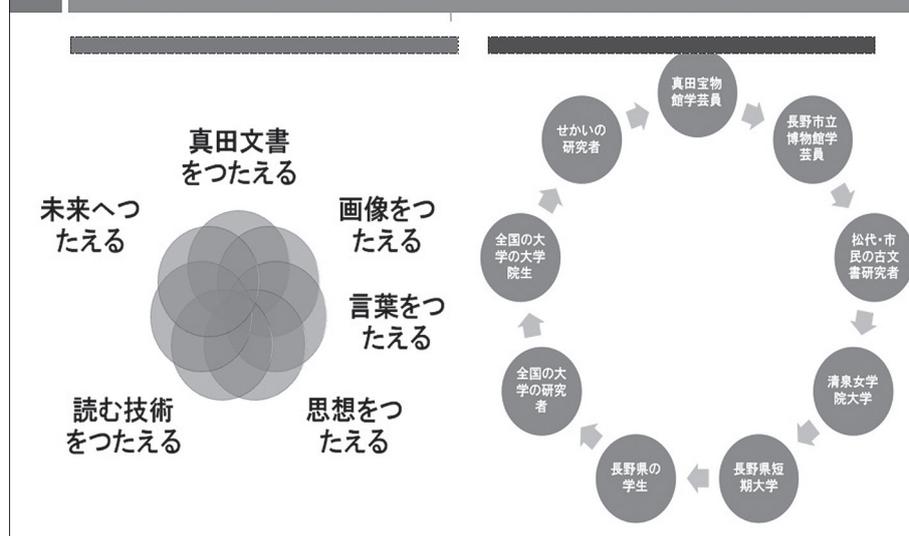
☆「真田文書アーカイブの構築及び松代藩六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」(平成22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))代表:清泉女学院大学教授 玉城 司)に基づく催しです。

☆真田宝物館・長野市立博物館の学芸員、全国の大学の研究者、松代を中心とした市民の古文書研究者、大学院生・長野県内の学生を結ぶ、新しい知のネットワークを構築します。

☆後援 長野県教育委員会 長野市教育委員会

☆協力 清泉女学院大学 長野県短期大学 真田宝物館

つたえる コミュニケーション・ネットワーク つながる



【真田フォーラム】

細川重賢と俳諧 二〇二〇年八月一九日 長野市生涯学習センター 西田耕三

一 細川重賢（一七二〇―一七八五）

熊本藩八代藩主 六代宣紀^のの第五子。七代宗孝の弟で仮養子。宗孝急死後、跡を継ぐ（一七四七）。熊本藩中興の祖といわれる。俳号華裏雨

二 松平重寛（一七四六―一七八三）

鳥取藩主 母桂香院は、紀伊大納言宗直の娘で、細川宗孝の妻静証院の妹。妻は田安宗武の娘。俳号玉馬。

三 細川重賢俳諧資料

『俳諧集』（出水叢書十二、汲古書院、一九九四）

四 興行（点取）

連絡（書簡、江戸城登城時？）

興行場所（江戸藩邸が多い）

点取帳の回覧

五 連衆（人との交流）

他の大名

三花（摂津麻田青木甲斐守一貫）、甘棠（今治藩主松平内膳正定^と奉）、錦車（福井藩主松平重宣）、李井（大和柳生柳生但馬守俊則）、孔阜（明石藩松平若狭守直泰）、祭水（日出藩木下大和守俊泰）など

家臣（近習・小姓―中野嘉太郎編『細川越中守重賢公伝』、昭和十一年）・妻蘭舟（久我右大臣通兄の娘由婦姫。俳諧の場所は雲和閣が多い）

俳諧宗匠・お城坊主・能役者

存義・桜川・鶏口・温克・祇丞・田女・常仙・可因・買明・秀国など

田旦（石井永庵）、百樹（近藤意泉）、餅字（小坂長春）など

波京（能役者 喜多七大夫）

*大名の俳号 花咲一男『柳沢信鴻日記覚書』（三樹書房、平成三年）・「松鶴日記」天明六年の項・「宴遊日記」の服部幸雄解題（日本庶民文化史料集成十三巻、三二書房）・加藤定彦編『俳諧點印譜』（青葉堂書店、平成十年）

六 漢詩人の死

一七五七年（宝暦七年）高野蘭亭、一七五九年（宝暦九年）服部南郭、
一七六三年（宝暦十三年）秋山玉山、一七六七年（明和四年）服部仲英、
一七六八年（明和五年）日出藩の木下俊泰

【資料】重賢公御代御代筆扣

1 安永四年十月二十二日 玉馬様

拝読、廿五日御出之義、昨夜得貴意候付而御楮上之趣被入御念御事奉存候。右之節、三花相招候様被仰下承知仕候。

（鳥取藩の『江戸御留守居日記』の安永四年十月二十五日の項に「九時之御供揃二而細川越中之守様江御出被遊候」とある）

2 安永三年二月二十四日 玉馬様

然者頃日御出之懐紙、出点之儀被仰下承知。昨日披キ相済、青木甲斐守、織田山城守一覽、直二持参二而御座候。定而青木方江参居可申候間、彼方江被及御取遣候様二と奉存候。

3 安永二年八月十八日 玉馬様

此間之出点御見せ被下、忝奉存候。一覽仕、則返仕候。買明点、参次第御見せ可被下由承知仕候。

4 安永二年五月二十日 松平相模守様

先日之百員、出点相済候に付、御詠草共被遣之忝落掌仕、則遂被見直返壁仕候。拙子勝候卷者任仰留置申候。

5 安永四年九月二十七日 松内膳正様

然者此間之九評、別紙書付入御覽候。御勝之懷紙二冊共直二御留置可被成候。

6 安永四年十一月十九日 玉馬様

然者廿五日之卷、被成御覽度由承知仕候。披相濟候付、則七評附御使呈進仕候。直二御留置可被成候。右之内田且勝者、参上之節御渡可被下候。

重賢公日記 安永四年十月 (懷中日記)

△家語始
 猿、代皇
 代皇
 大丸代
 ○七評
 △安宅賞
 牛 森林院 白銀 谷皇
 常盤橋 白銀 糺 皇
 眞料理 ○片母出
 枕 野 河 孔
 晦

三三 百韻協起 安永四年十月二十五日 表海楼

初時雨猿も小糞をほしけなり	買明 鶏口 多少 墨兒 田女 常仙 宗梅		翁
こゝろまかせに冬枯の旅			執 筆
枝垂し松も齡の杖つきて			、
客の望にかなふ響心			、
一ト番ひ飛人なしの碁石鶏			、
押におし合糊摺りの場			、
腰の鍵からりくと暮の月			、
詠るうちについこはれ萩			、
我書た手紙の読めぬ二日酔	ウ	□	杏 里
痛人たる妻の敵立			好 山
起々の素顔恥かし鉢た、き			菊 扇
余所に聞かれぬ左遷の貝			南 飛
風上に干鬮俵そうかりける			存 義
夏を忘れに這人土手蔵			華 裡 雨
気にかゝる夢を聖の言消して			玉 馬
泊り合ては腰を抱く後家			南 飛
宗長か庵を尋る川つかへ			李 蹊
萩の垣根をらりにする馬			餅 字
雷の落た沙汰有る田は実り			燕 里
月の夕へをよこす雨露			執 筆
物好て新に出来る花の幕			、
黄蝶遊ぶ井手の玉河			田 且

初時有縁も小筆傳へて五郎空	翁
故縁ももつて松の縁	執筆
枝葉も松の縁の枝はもつて	
宿の縁ももつて松の縁	
下宿の縁ももつて松の縁	
押さお宿松の縁の場	
宿の縁ももつて松の縁	
宿の縁ももつて松の縁	
我書之縁ももつて松の縁	杏里
宿の縁ももつて松の縁	好山
起の縁ももつて松の縁	菊扇
余所ももつて松の縁	南飛
風上ももつて松の縁	存義
復ももつて松の縁	善禪
音ももつて松の縁	玉馬
宿の縁ももつて松の縁	南飛
宗長ももつて松の縁	李蹊
秋の縁ももつて松の縁	餅字
雷の縁ももつて松の縁	燕里
月の縁ももつて松の縁	執筆
柳の縁ももつて松の縁	
音ももつて松の縁	田且

買明評	玉馬	好山	李蹊
鶏口評	玉馬	田且	餅字
多少評	玉馬	好山	餅字
温克評	田且	存義	波京
田女評	玉馬	李蹊	田且
常仙評	玉馬	田且	餅字
宗梅評	玉馬	波京	餅字
三二七点	玉馬	一六〇点	杏里
三三七点	田且	一三四点	南飛
一〇四点	餅字	一二五点	菊扇
一九九点	李蹊	一二二点	筆裡雨
一九七点	存義	一五一点	燕里
一七九点	好山	一〇七点	孤英
一六七点	波京		

【菊貫一座】

七三 百韻脇起 安永六年十二月五日

	賈明	櫻川	百万	鶴口	温克	可因	田女	秀国	常仙	宗梅	白頭	菊堂	漕馬	冬英	雨沢	
面白し雪にやならん冬の雨	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	はせを
火桶に咲は撫子の花	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
掘ぬきを所望に長者尋来て	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
獻立になる鮑さたをか	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
十五東人た敷のいちしるき	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
狂言袴誰このみけん	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
薄へりを蜘蛛に敷し月の庭	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
はちくはかりに貫ふ枝豆	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
(7) 鱧釣りの暦になれと紅葉して	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	南飛
戸のない駕の好な仇人	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	孤英
恋風は襟から這入る物ならん	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	杏里
千鳥の宿に温石を焼	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	存義
這わたる須磨と明石に鐘の声	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	葵足
琵琶の伝授の夜も静也	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	菊車
立廻る時に屏風を引倒	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	燕里
只 刷毛に書し画の月	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	吐雲
駒牽の京かみゆると唄止めて	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	、
風の身に人む麻衣の袖	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	南飛
酒買ふた通ひてあふく酒の爛	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	三花
垣越にのむ明日の当番	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	波京
片へからそらく花の咲かゝり	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
たはこすはくもゆる陽炎	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	
(二) 手を出せば仲居の拳にこま鳴て	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	玉馬
喧嘩に近き生男の恋	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	計之
夜明かと梅折て見る年忘	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	菊貫
雪の芙蓉を持歩行く盆	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	華裡雨
蠣殻を踏んで鮫頭の岡誓	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	甘棠
海へひろかるとろ風の鐘	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	燕里
楼の膳は車で引上る	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	鼎
恨こうして三ノの高きれ	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	宗賦
双六の旅も禿か二人つれ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	菊貫
枕をすると起る春宵	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	華裡雨
草若葉崩れ網代の水澄て	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	孔阜
説経かたり馬に徴たり	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	存義
残りなく雲吹やりて風の月	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
遷宮年の道のとやく	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	

(二ウ) 孝行の錦て戻る司召 七
 亭から呼て人を反らせる
 活ヶ鯉の使はぬれて横を向き 三
 袖みそか鴨か組板の音 五
 寒念仏戻りは白し袖の霜 五
 とり揚婆々を議る駕昇 五
 漸に十六文に性か付き 十五
 はねる松魚に迂るかまくら 七
 声なくは詠れし物を予規 十五
 落馬の所化の口もへらすに 五
 夢ならて人も問来ぬ山住る 三
 神から顔は臙なる月 三
 鞆の綱かさはりて花か散 三
 くるふては逃にくる蝶々 七
 (三) 帆を上る矢橋に比叡の雨晴て 三
 智月か釋かけは牡丹餅 七
 夏菊の葉のはかなさを恨けり 七
 なけの情の遠さかりぬる 三
 一旦は通ふ難波の一夜妻 五
 のそく上へ上る鶏 五
 吸付る火も見へかぬる関の霧 五
 光ちらりと宵過る月 七
 せはしなくあふ踊の素帷子 三
 角力も成やと笑ふ腹形 五
 新そはに昨日もけふも日を暮し 七
 二三十軒ほと弓の組下 七
 車井に屠蘇を下ろせは後聞て 七
 硯に墨の漣付てゐる 五
 (三ウ) 紫野法事の膳に橋をかけ 五
 何所て聞ても喰食の声 三
 更衣樹々もわか葉の重りて 三
 妹をなふつて逃る蝙蝠 七
 来へき夜と又置てみる畳算 七

買明評
 楼川評
 百万評
 鶏口評
 常仙評
 宗樺評
 白頭評
 菊堂評

吐雲
 菊貫
 南飛雲
 吐雲
 玉馬
 吐雲
 玉馬
 吐雲

三花
 南飛雲
 甘棠
 吐雲
 菊貫
 吐雲
 玉馬
 吐雲

葵足
 存義
 三花
 吐雲
 孔阜
 吐雲
 孔阜
 吐雲

温克評
 可因評
 田女評
 秀国評
 連馬評
 冬英評
 雨沢評

葵足
 玉馬
 吐雲
 玉馬
 吐雲
 孔阜
 吐雲

吐雲
 存義
 吐雲
 玉馬
 吐雲
 孔阜
 吐雲

宗賦
 南飛雲
 三花
 存義
 玉馬
 吐雲
 玉馬

杏里
 孤英
 菊車
 鷺丸
 珊瑚躑
 葵足
 鷺丸
 珊瑚躑
 鼎賦
 紀連
 吐雲
 存義
 菊車
 鼎裡雨
 計之
 玉馬
 孔阜
 紀連
 計之
 鷺丸
 甘棠
 燕里
 宗賦
 珊瑚躑
 杏里
 孤英

真田幸弘と島原松平家の俳諧

井上 敏 幸

(佐賀大学名誉教授)

(佐賀大学地域学歴史文化研究センター特命教授)

- 一、はじめに
- 二、島原松平文庫所蔵の大名俳諧資料
- 三、島原松平家と信州真田家の縁戚関係
- 四、真田家の文芸資料に見られる松平家の人々
- 五、大名俳諧の意味
- 六、結語

A 斗来公・升来公・巴人等俳諧資料一覧（松平文庫蔵『点取俳諧帖』）

- | | | |
|---|----------------------------|-----------|
| 一 | 「風冷や」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-1 |
| | 風冷や賑やかに聞秋の音 庭に一木の色替ぬ松 | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 木髪 | |
| 二 | 「村消の」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-2 |
| | 村消の雪間に青き若菜哉 木伝ふふりも梅に鶯 | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 一陽井 | |
| 三 | 「かひ鋪し」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-3 |
| | かひ鋪し葉に持つ風や夏料理 四方晴々と蠅も来ぬ楼 | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 亀翁 | |
| 四 | 「うくひすや」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-4 |
| | うくひすや煎餅つなく糸の上 霞につゝく覺千軒 | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 田社 | |
| 五 | 「群つゝの」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-5 |
| | 群つゝの人のはしめや花の春 四海を磨くあら玉の年 | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 素粒 | |
| 六 | 「こゝろなく」百韻 懐紙一帖 | 松平145-8-6 |
| | こゝろなく出てかたちあり雲の峯 蟬時雨する森の一むら | |
| | 連衆名 なし | |
| | 点者 古瓢 得器 | |

- 七 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-7
 群つゝの人の始めや花の春 霞むる毎に笑ふ四方山
 連衆名 御
 点者 随意翁
- 八 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-8
 群つゝの人の初めや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆名 なし
 点者 雀阜亭
- 九 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-9
 群つゝの人の初めや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆名 なし
 点者 野鷄舎
 文化十一年甲戌元乙
- 十 「木の下に」百韻 懷紙一帖 松平145-8-10
 木の下に季をかへてけり桐一葉 目にさやかなる夫ぐの露
 連衆 良雨 ? 升来公
 点者 季堂
- 十一 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-11
 群つゝの人の初めや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆名 なし
 点者 □文
 文化十一年甲戌元一
- 十二 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-12
 群つゝの人のはじめや花の春 霞むる毎に笑ふ四方山
 連衆名 なし
 点者 歆時齋 御国
- 十三 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-13
 群つゝの人の初めや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆名 なし
 点者 評運速 春陽井蒼洲
- 十四 「わか艸や」百韻 懷紙一帖 松平145-8-14-1
 わか艸や目に余る成る名無原 雑木を花の斧入る山
 連衆 フ(執筆) 斗来 曉鳥 起十
 点者 李下庵
 斗来 百七十九点 / 起十 百十六点 / 曉鳥 九十三点 /
 安永三甲午年二月廿八日於宇陽開卷
- 十五 「群つゝの」百韻 懷紙一帖 松平145-8-14-2
 群つゝの人の初めや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆名 なし
 点者 素塵

- 文化十一年甲戌元旦
- 十六 「萍（つきくさ）や」百韻 懷紙一帖 松平145-8-143
 萍や池の辺も暮てから 二階くわらりと風薫る夏
 連衆名 なし
 点者 春陽井蒼洲
- 十七 「出て見れば」百韻 懷紙一帖 松平145-8-144
 出て見れば風のすどき冬野哉 ひら一面に置まとふ霜
 連衆名 なし
 点者 三世宝井
- 十八 「闇に声」百韻 懷紙一帖 松平145-8-145
 闇に声月に姿のおとりかな 紅葉に西瓜先□る色
 連衆名 なし
 点者 山花
- 十九 「移し植て」百韻 懷紙一帖 松平145-8-146
 移し植て今楽しさよ萩の花 明て人待月の枝折戸
 連衆名 なし
 点者 買明
- 二十 「折程の」百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-147
 折程の枝にふりあり梅の花 朝夜さ毎に駒鳥を聞く
 連衆名 なし
 点者 不明
 表紙欠。第六十五句目以降欠。
- 二十一 「群つゝの」百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-148
 群つゝの人のはしめや花の春 枝もならさぬ御代の門松
 連衆 升来公 巴草 巴人 桂枝 素文 露弓
 点者 素粒（松平145-8-5と同じ点印）
- 二十二 「ほと、きす」百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-149
 ほと、きす啼や迷はす人心 奇麗に見ゆる夏の袖垣
 連衆名 なし
 点者 不明
 表紙欠。第六十五句目以降欠。
- 二十三 「若葉して」百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-1410
 若葉して其後は疎し花の露 連れある扇かさすにも時宜
 連衆名 なし
 点者 立志
 表紙欠。中間欠。八十四句存。
- 二十四 永機点百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-1411
 発句・脇句なし。発句より第十六句目まで欠。
 連衆名 なし
 点者 永機

- 表紙欠。第十七句目より挙句まで八十四句存。
- 二十五 陸州点百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-14-12
 発句・脇句なし。発句より第二十四句目まで欠。
 連衆名 なし
 点者 陸州
- 表紙欠。第二十五句目より挙句まで七十六句存。
- 二十六 素粒点百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-14-13
 発句・脇句なし。名残折の表・裏を含む五十句存。
 連衆 升来公 桂枝 巴人 巴草 素文
 点者 素粒
- 表紙欠。五十句欠。
- 二十七 点者不明百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-14-14
 発句・脇句なし。六十四句存。
 連衆名 なし
 点者 不明
- 表紙欠。三十六句欠。
- 二十八 信天翁点百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-14-15
 発句・脇句なし。挙句余興八句を含む四十句存。
 連衆名 なし
 点者 信天翁
- 表紙欠。六十八句欠。
- 二十九 不鸞点百韻断簡 懷紙一帖 松平145-8-14-16
 発句・脇句なし。二十八句存。
 連衆名 なし
 点者 不鸞
- 表紙欠。七十二句欠。
- 三十 評点紙断片 一枚 松平145-8-14-17
 菊貫 陸州 箕十 / 天 升来公 地 菊貫位 人 陸州子

B 寛政十年六十賀集・文化五年七十賀集所載升来公・鶴媛公・家臣等の作品及び記録

松平主殿頭忠馮 升来公

松平主殿頭 升来
 若みとりかはらぬいろや軒の松 (寛政十年『千とせの寿詞』)

松平主殿頭 升来
 君とまつと千とせ契るや庭の春 (文化五年『千とせの寿詞』)

(短冊配布)
式包 松平主殿様 (寛政十年『耳順御賀日記』)

(祝儀贈品)
御酒器 一箱
同硝子仙散瓶名酒入 松平主殿頭様
同御蓋物甘露梅入 但御国許より被進候 (寛政十年『耳順御賀日記』)

(答礼品)
御肴代百匹 嶋原表江松平主殿頭様
御壽餅御饅頭 (寛政十年『耳順御賀日記』)

松平主殿頭室 鶴媛公

松平主殿頭室 鶴媛
見つ見せつ幾十返りも君と松 (文化五年『千とせの寿詞』)

松平主殿頭忠馮室 (空白)
七十のとなりの庭の松の色に君か千とせそ見え初にける (寛政十年『千とせの寿詞』)

松平主殿頭室 多寿子
ちよ経とも尽せぬ庭の松の葉を君か齡の数に数えむ (文化五年『御ことほぎ記』)

御肴一折 御奥様
御壽餅御饅頭 (寛政十年『耳順御賀日記』)

(祝儀贈品)
御肴 一折
御盃 松平主殿頭様之
名酒 一陶 御奥様より
鱸 一折 御同所様之
政之助様より
御肴 一折 御同所様之
御扇子 大炊助様より (寛政十年『耳順御賀日記』)

岩瀬勘平 初千之助 兵太 一高百三拾石 外式拾石役料
元文五申七月、父兵右衛門跡式拾人扶持遣。宝曆五亥六月、新知百石。同十二年十月、大御殿

小納戸。明和七寅十一月、同所用人。同九辰四月、役料三拾石。安永二巳四月、病氣依願役儀差免取次役料其俣遣。同四未七月、用人禮席。同五申四月、役料増式拾石。寛政八辰三月、役料之内三拾石本知直遣。同十二申七月、老衰依願隱居学問所之儀致世話候付式人扶持遣。文化七午十二月、死去。

同賦檐松有嘉色奉寿 松城候六

十初度 松平主殿頭家中岩瀬勘平 盤瀬行言

清朝久寵歲寒林。磊落從來將種哉。日暖流膏餘沈澗。天晴偃蓋蔭樓台。
灑々零露罇中滿。諛々長風坐上廻。自古松城号雄鎮。万年猶更望崔嵬。

(寛政十年『千年の寿辞』)

松坂丈左衛門 初満 太十郎 一高式百石 外役料百石

寛政三亥四月、扶持遣中小姓呼出。同年十一月、通番。同六寅正月、小納戸詰。同八辰正月、新給。同年二月、中老嫡子席順。同九巳閏七月、向後月並五節句不時禮之節奏者方相勤候様。同十一未六月、足米四石。同十二申七月、小納戸勤。享和元酉十二月、近習目付加勤。文化元年子五月、扶持拾人二直大横目加勤。同二丑八月、取次勤。同四卯四月、側役用取次勤。同年六月、番頭。同年十一月、側用人。同五辰四月、新知百石。同七午四月、養父丈左衛門家督無相違遣。同八未三月、老連判役役料五拾石。同十二亥六月、役料増五拾石。文政五年十二月、病死。

同松坂太十郎 巴人

にはの松ちきるや千代のわかみとり

(文化五年『千とせの寿詞』)

市川五郎大夫 初勝太郎 泰藏 一高百石

宝曆七丑十一月、給扶持遣中小姓呼出。同十四申四月、足米四石。明和四亥十月、大御殿小納戸詰。同八卯七月、通番。安永九子正月、足米三石。天明二寅三月、小納戸。同三卯正月、拾人扶持直。同四辰十二月、亡父傳大夫跡式無相違遣。同七未七月、武具奉行。寛政十年正月、物頭。享和四子正月、役料三拾石。文化二丑七月、近習目付。同四卯六月、奥大目付。同八未三月、再物頭。同十一戌三月、依願役儀差免馬廻。同年十一月、死去。

松平主殿頭家中市川五郎大夫 光甫

此庭に生添まつもけふよりは君に契て万世を経よ

(文化五年『御ことほぎ記』)

富永官右衛門 他家より養子 初十治十右衛門 十左衛門 一高百五拾石 外百石役料

宝曆四戌七月、給扶持遣次番呼出。同八寅九月、通番。同十二年八月、小納戸詰。同年十月、大御殿附。同十三未六月、四石足米。明和二酉八月、同所小納戸。同三戌十月、家督無相違遣。同四亥二月、馬廻。同六丑六月、表小納戸勤。同九辰二月、近習目付小納戸兼帯。安永三午四月、側役。同五申四月、役料五拾石。同七戌九月、用取次差免以来月番并支配其外勤定奉行同様相勤候様側向之儀是迄之通。同九子十月、役料増三拾石遣用取次勤定奉行勤差免権門方懸り。天明二寅四月、勝手方頭取。同四辰九月、用人役料増式拾石。同五巳正月、用取次差免勤定奉行兼。寛

政七卯九月、当分留守居助勤。同十年九月、表用人勝手方勘定奉行申談相勤候様禮席是迅之通。同十二申八月、側用人再役勝手方懸差免。文化元子二月、役料之内五拾石本知二直。同五辰八月、老連番役。同六巳三月、五拾石役料増。同九申二月、依願隱居。

松平主殿家中富永十左衛門 盧舟

檐のまつも君をや祝すはるの色 (寛政十年『千とせの寿詞』)

松尾幾之丞 権大夫 一高百石

寛政四子十一月、扶持遣中小姓呼出。同十年五月、通番句読師見習。同十一未六月、新給。同十二申八月、小納戸詰。享和三亥六月、小納戸。同年十月、足米四石。文化二丑七月、扶持拾人二直兼物附。同五辰正月、近習目付。同年四月、大横目見習。同九申正月、役扶持五人。同十酉十月、大横日本席勤方近習目付。同十二亥五月、役儀取上馬廻。同十三子七月、家督無相違遣。天保六未正月、病死。

同松尾幾之丞 松子

幾はるやちきりもひさしにはのまつ (文化五年『千とせの寿詞』)

酒井太郎右衛門 実求馬二男 初十三郎 助大夫 善五左衛門 一高貳百石

宝曆四戌七月、給扶持遣次番呼出。同五亥十二月、四石足米。同八寅二月、小納戸詰。同年八月、家督無相違遣。同九卯閏七月、小納戸。同十二午十月、大御殿小納戸。明和元申十一月、同所附差免当席懸馬廻。同二酉正月、物頭。安永四未七月、大横目。同八亥三月、馬廻。寛政十一未八月、取次。文化二丑六月、死去。

同酒井助大夫 洋峨

いく千世もまつにちきるや庭のはる (文化五年『千とせの寿詞』)

島田平右衛門 他家より養子 初乙藏 無節 一高貳百石 外貳拾石役料

元文三午三月、新給拾石扶持遣中小姓呼出。同四未正月、次番。延享三寅三月、拾五人扶持二直。同五辰正月、新知百石。寛延元辰閏十月、膳番。同二巳正月、側役並之通役料遣。同年六月、役義差免馬廻。同二巳八月、家督無相違申付。明和元申七月、大横目。同五子正月、元々格二而隼人方附。同八卯朔、秀太郎附奥勤取次本席奥方附兼帯。安永六酉正月、用人格。同八亥正月、用人本席。天明二寅七月、勝手方懸頭取。同三卯正月、貳拾石役料。同七未二月、又八郎附老連判役。寛政九巳十二月、依願隱居扶持三人遣。

同島田無節 山鳥

此はるのいろを幾千世のきの松 (寛政十年『千とせの寿詞』)

松平主殿頭家中嶋田氏年行八十八歳 無節

君と友にまつもいくよ、若みとり (文化五年『千とせの寿詞』)

佐久間文治 初三亭 文次郎 一拾五人扶持

安永五申四月、七人扶持遺醫師呼出。同六酉正月、加扶持三人。同七戌八月、還俗申付加扶持五人馬廻。天明五巳正月、秀太郎附近習目付。寛政十一未年、死去。

松平主殿頭家中佐久間文治 純倉

苔さへもをひせぬ門の軒の松てうとむさしのときはかきはに

(寛政十年『千とせの寿詞』)

同賦 檐松有嘉色奉寿 松城滋野

賢侯 同 佐久間文治郎 佐維亭

蒼松千尺望蒼然。秀色迎春映綺筵。十二重櫺影笈響。看留雀影舞簷前。

(寛政十年『千年の寿辞』)

三包 佐久間文治

右者前長二御賀詠御短冊被進候節

(寛政十年『耳順御賀日記』)

一同御到来并御当月御到来共

御台 松平主殿頭様之 佐久間文治

嶋田無節

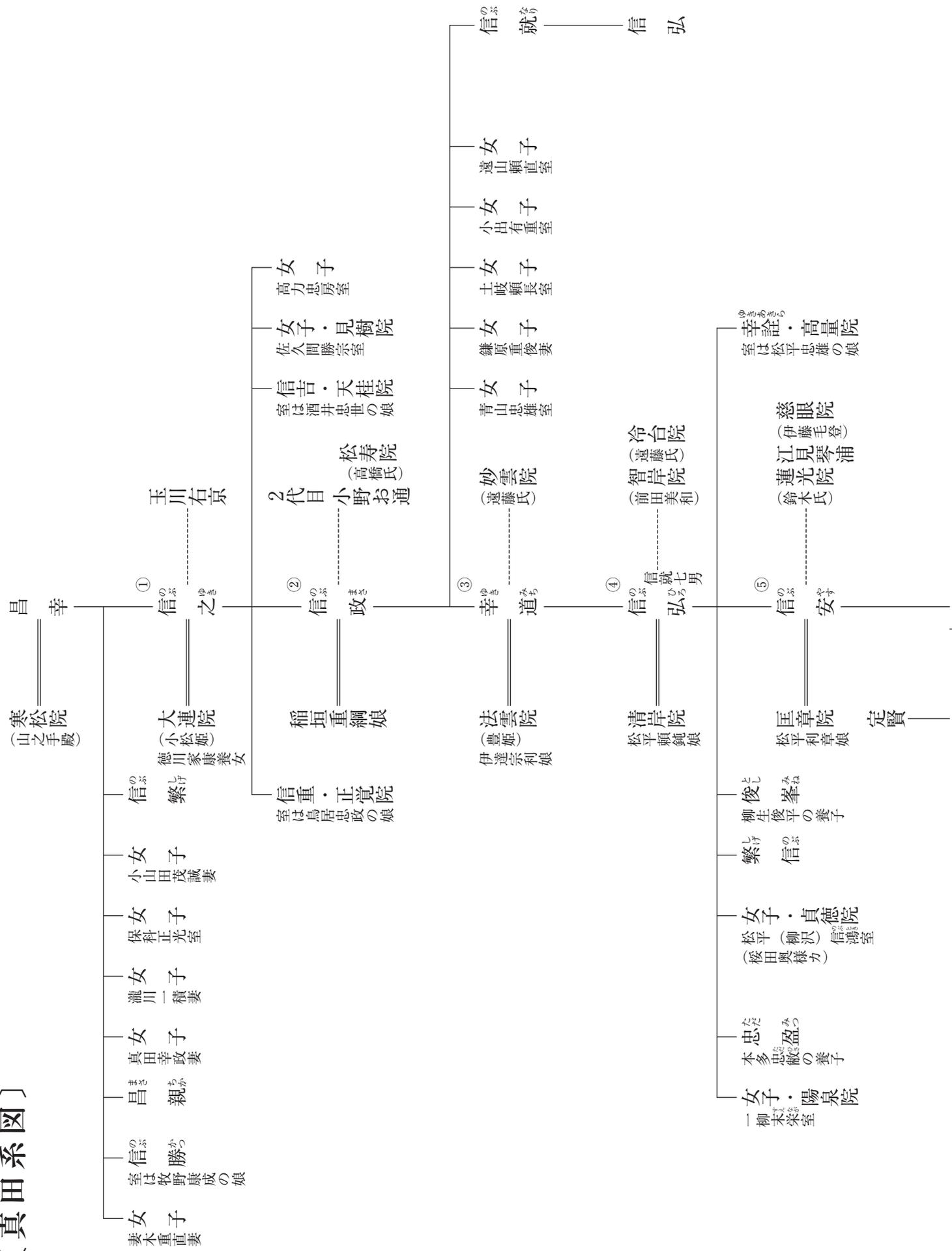
(寛政十年『耳順御賀日記』)

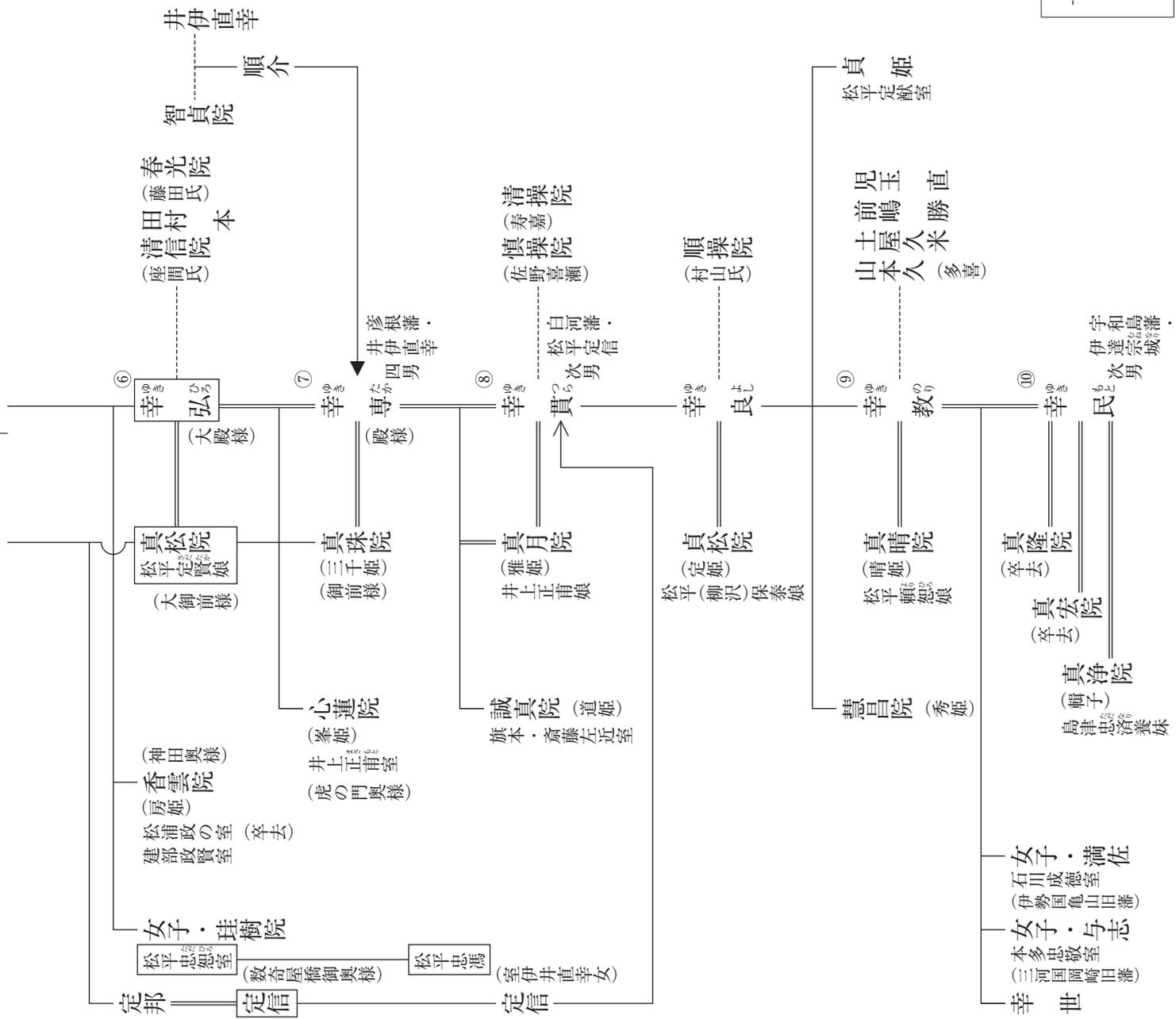
同断 (御寿餅一袋) 松平主殿頭様之 嶋田無節

同断 同 佐久間文次郎

(寛政十年『耳順御賀日記』)

〔真田系図〕





凡例

- 一、『寛政重修諸家譜』『藩史大辞典』をもとに作成し、『国立史料館所蔵史料目録・真田家系図』『藩史総覧』『松代藩庁と記録』により補った。
- 二、早世の子息・女については略した。

図録『真田家の名室』(H13)より作成

E 斗来公・升来公・鶴媛公俳諧一覽

- 1 安永元年八月 (菊の分根)
「根を分ける」百韻 斗来 (持)
数奇屋橋御連 七評 31-3-21-1B3
- 2 安永元年十二月十四日開点 (菊の分根)
「しみじみと」百韻 斗来 (持)
右六評 31-3-21-1B14
- 3 安永元年十二月吉日開 (菊の分根)
「水仙の」百韻 斗来 (持)
初五十句数奇屋橋御連後五十句海津御連都合百句宗匠九評 2004-1-14B3
- 4 安永二年二月廿日開 (菊の分根)
「水に住む」百韻 斗来 (持)
右十評 2004-1-14B15
- 5 安永三年四月二十二日 (菊の分根)
「野を横に馬牽向けよ時鳥 はせを」百韻 斗来 31-3-21-5B8
- 6 年次不明 (菊の分根)
「誰か為に」百韻 斗来
右初秋未四 席 31-3-21-1B1
- 7 年次不明 (菊の分根)
「旅したる」百韻 斗来 (持) 31-3-21-1B6
- 8 年次不明 (菊の分根)
「草の戸や」百韻 斗来 31-3-21-1B7
- 9 年次不明 (菊の分根)
「木母寺に」百韻 斗来
右仲秋朔開 31-3-21-4B8
- 10 安永三年八月二十七日 (総評一万句)
総評一万句 斗来
右一万句十文台 安永第三壬午八念七日会於兩國橋西河内屋
同九月七日開於麴町日野屋 会主 菊堂 31-3-14-1
- ☆☆11 享和二年十二月 (幾久島)
歲籠「上りたる」百韻 升来 (持・点) 鶴媛 (持・点) 4-1-1-1B8
- ☆☆12 享和三年閏正月 二月四日満尾 (幾久島)
「旅の氣に」百韻 升来 (持) 鶴媛 素文
(勝卷) 升来二卷鶴媛一卷 菊貫二卷 (十評ノ内) 4-1-1-1B2
- ☆ 13 享和四年春 (幾久島)
歲籠「蒼生たみの」百韻 鶴媛 (点) 1931-3-2B1
- ☆☆14 文化元年七月十七日 八月朔日満尾 (幾久島)
「音立て」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持) 素文
(勝卷) 升来〇卷 鶴媛四卷 菊貫六卷 (十一評ノ内) 31-3-4-5B1

- 15 文化元年八月五日 (幾久畠)
「遠里の」百韻 升来(持)
(勝卷) 升来一卷(七評ノ内) 菊貫三卷(七評ノ内) 升来子出會席 31-3-4-5B3
- ☆☆16 文化元年八月六日 (幾久畠)
「稻は花の」百韻 鶴媛(持) 升来(持)
(勝卷) 升来五卷 鶴媛〇卷 白日六卷(十五評ノ内) 催主 升来子 31-3-4-4B1
- ☆☆17 文化元年九月五日ヨリ廿四日満尾 (幾久畠)
「露しくれ」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 升来〇卷 鶴媛四卷 白日十卷(十五評ノ内) 催主 鶴媛子 31-3-4-5B5
- ☆☆18 文化元年九月 (幾久畠)
俳諧之連歌「漏代る」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 升来六卷 鶴媛一卷 白日二卷(十五評ノ内) 31-3-4-2B3
- ☆☆19 文化元年十月十八日ヨリ (幾久畠)
俳諧之連歌「風情見ゆ」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 升来三卷 鶴媛五卷 菊貫六卷(二十評ノ内) 催主 升来子 31-3-4-4B5
- 20 文化元年十月 (幾久畠)
俳諧之連歌「今日ばかり人も年寄れはつ時雨 芭蕉」百韻 升来(持)
(勝卷) 升来三卷 白日三卷(三十評ノ内) 1931-3-3B3
- ☆☆21 文化元年十一月十二日 (幾久畠)
年籠俳諧之連歌「墨色の」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 八卷升来 七卷白日 三卷鶴媛(二十評ノ内) 4-1-6-4B1
- ☆☆22 文化元年冬 (幾久畠)
年籠百韻「春も漸景色と、のふ月と梅 芭蕉」升来(点) 鶴媛(点) 1931-3-5B
- ☆☆23 文化二年正月廿五日 二月十三日満尾 (幾久畠)
「永き日や」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 升来三卷 鶴媛九卷 菊貫三卷(二十評ノ内) 4-1-6-4B4
- ☆☆24 文化二年春 江戸總評百韻 (幾久畠)
「春もや、けしき整う月と梅」百韻 升来 鶴媛
升来十一卷 鶴媛三卷 菊貫九卷(九十六評) 松平主殿頭 升来/同奥方 鶴媛
4-1-3-1
- ☆☆25 文化二年二月十三日ヨリ (幾久畠)
「春来ては」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
御勝 升来八卷 鶴媛〇卷 菊貫六卷(十五評ノ内) 4-1-6-4B5
- 26 文化二年二月十九日初席 二月廿六日満尾 (幾久畠)
「鶯の」百韻 升来(持) 素文
(勝卷) 升来五卷 白日二卷(十評ノ内) 4-1-6-4B6
- ☆☆27 文化三年七月十七日 (幾久畠)
俳諧之連歌「月空し」百韻 升来(持) 鶴媛(持)
(勝卷) 升来一卷 鶴媛七卷 菊貫八卷(五十評ノ内) 4-1-6-9B3-1

- 28 文化三年七月十九日 (幾久島)
「蜻蛉や取つき兼し草のうへ 翁」百韻 升来 (持)
(勝卷) 白日八卷 升来三卷 (五十評ノ内) 4-1-6-10B1-1 (2)
- 29 文化三年八月 (幾久島)
俳諧之連歌「大風を」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来二卷 菊貫七卷 (四十五評ノ内) 4-1-6-10B2
- ☆☆30 文化三年八月 (幾久島)
「茸狩や」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来一卷 鶴媛五卷 白日七卷 (二十評ノ内) 4-1-6-10B3
- ☆ 31 文化三年九月五日 (幾久島)
俳諧之連歌「飯前の」百韻 鶴媛 (点) 4-1-55
- ☆☆32 文化三年九月廿五・ヨリ 十月十九日満尾 (幾久島)
俳諧之連歌「鐘撞の」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来一卷 鶴媛二卷 菊貫五卷 (二十評ノ内) 4-1-6-12B5
- ☆☆33 文化三年九月廿七日後座 (幾久島)
「松蔭や」百韻 升来 (点) 鶴媛 (点) 4-1-6-11B2
- 34 文化三年十月四日 (幾久島)
俳諧之連歌「見るもの、」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来三卷 菊貫六卷 (四十五評ノ内) 4-1-6-11B3
- 35 文化三年十月四日ヨリ (幾久島)
俳諧之連歌「兎も角もならてや雪の枯尾花」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来〇卷 菊貫四卷 4-1-6-11B5
- ☆☆36 文化三年十月廿日 (幾久島)
俳諧之連歌「水鳥の」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来二卷 鶴媛七卷 菊貫五卷 (二十評ノ内) 4-1-6-13B1
- 37 文化三年十一月六日 (幾久島)
「水仙や」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来一卷 菊貫四卷 (五十評ノ内) 4-1-6-13B4-1 (2)
- 38 文化三年十月晦日 四年 正月開 (幾久島)
年籠俳諧之連歌「空も野も」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来二卷 白日十二卷 (百九評ノ内) 4-1-12-9B1
- ☆☆39 文化三年十一月十七日 (幾久島)
年籠俳諧之連歌「朝夕の」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来二卷 鶴媛二卷 白日九卷 (二十一評ノ内) 4-1-12-9B2
- ☆☆40 文化三年冬 (幾久島)
年籠「白丁の」百韻 升来 (点) 鶴媛 (点) 4-1-12-9B3
- 41 文化四年正月八日 (幾久島)
俳諧之連歌「鶯の」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来三卷 菊貫十四卷 (五十七評) 31-3-7-1B1 (2)

- ☆☆42 文化四年正月十一日 (幾久畠)
「日々く」に」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来二卷 鶴媛三卷 菊貫八卷 (二十五評) 31-3-7-1B2
- ☆☆43 文化四年二月二日 二月七日 (開) (幾久畠)
俳諧之連歌「朧月や」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
(勝卷) 升来四卷 鶴媛八卷 菊貫六卷 (二十五評ノ内) 文化四年季春鶴媛公御催主
31-3-7-1B3
- ☆ 44 文化四年二月七日 卯月十日 (幾久畠)
七百六十一会第二席 俳諧之連歌「春風や」百韻 鶴媛 4-1-11-3B2
- ☆ 45 文化四年三月二日 (幾久畠)
俳諧之連歌「鳥ひとつ」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫四卷 (二十評ノ内) 催主 春秋館陸州 31-3-7-2B4
- ☆ 46 文化四年三月下旬、五月初旬開卷 (幾久畠)
俳諧之連歌「しら鷺も」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫七卷 (二十評ノ内) 31-3-7-4B4
- ☆ 47 文化四年四月廿六日 (幾久畠)
俳諧之連歌「若葉々々」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛四卷 菊貫六卷 (十五評ノ内) 催主 春秋館 31-3-7-4B4
- ☆ 48 文化四年五月廿二日 (幾久畠)
俳諧之連歌「若竹や」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛五卷 菊貫九卷 (十五評ノ内) 31-3-7-5B4
- ☆ 49 文化四年六月中旬 (幾久畠)
俳諧之連歌「鴉から」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫六卷 (十五評ノ内) 催主 陸州 31-3-7-6B3
- ☆ 50 文化四年七月五日、廿五日満尾 (幾久畠)
俳諧之連歌「桐一葉」百韻 鶴媛 (持) 31-3-7-7B1
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫九卷 (十五評ノ内)
- ☆ 51 文化四年七月廿四日、文化四年八月 (幾久畠)
俳諧之連歌「網提て」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫十一卷 (十評ノ内) 催主 春秋館 31-3-7-7B3
- ☆ 52 文化四年八月廿二日、九月十三日満尾 (幾久畠)
俳諧之連歌「橋ひとつ」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛六卷 菊貫六卷 (十五評ノ内) 31-3-7-8B3
- ☆ 53 文化四年八月廿五日 (幾久畠)
連月定会 俳諧之連歌「能出来し」百韻 鶴媛
万年青社中 会主双見 (七百七十四会第十四席) 4-1-18-6B1
- ☆ 54 文化四年九月十五日 十月 (幾久畠)
俳諧之連歌「岩橋を」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫五卷 (十五評ノ内) 催主 春秋館 31-3-7-8B4

- ☆ 55 文化四年九月廿五日 (幾久畠)
連月定会 俳諧之連歌「菊の香や」百韻 鶴媛
万年青社中 会主双鳥 (七百七十六会第十六席) 4-1-18-6B3
- ☆ 56 文化四年十月十六日 (幾久畠)
俳諧之連歌「行違ふ」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛四卷 菊貫七卷 (十五評ノ内) 31-3-7-9B3
- ☆ 57 文化四年十月 十一月□日満尾 (幾久畠)
年籠俳諧之連歌「二日にもぬかりはせしな花の春」百韻 鶴媛 (点) 4-1-13-1B1
- ☆ 58 文化四年十一月十一日、十二月十四日満尾 (幾久畠)
年籠俳諧之連歌「渠も目に」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛三卷 菊貫十三卷 (二十五評ノ内) 文化五会青陽 4-1-13-2B1
- ☆ 59 文化四年十二月 (幾久畠)
「金屏の」百韻 鶴媛 (点) 4-1-13-2B3
- ☆ 60 文化五年正月十五日 (幾久畠)
俳諧之連歌「陽炎に」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛五卷 菊貫十一卷 (二十一評ノ内) 4-1-13-2B4
- ☆ 61 文化五年二月廿四日、四月朔日満尾 (幾久畠)
「柳に東」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛五卷 菊貫七卷 (十五評ノ内) 4-1-13-4B3
- ☆ 62 文化五年四月三日 (幾久畠)
俳諧之連歌「夜上りの」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛一卷 菊貫十卷 (十五評ノ内) 4-1-13-5B3
- ☆ 63 文化五年五月十八日 (幾久畠)
俳諧之連歌「蟬鳴や」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛二卷 菊貫七卷 (二十五評ノ内) 4-1-13-7B2
- ☆ 64 文化五年閏六月朔日 (幾久畠)
俳諧之連歌「ありかたき」百韻 鶴媛 (持)
(勝卷) 鶴媛一卷 菊貫四卷 (十五評ノ内) 4-1-13-9B2
- ☆☆ 65 文化五年七月六日 (幾久畠)
俳諧之連歌「袂から」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持) 巴人
(勝卷) 升来三卷 鶴媛四卷 巴人〇卷 菊貫〇卷 (二十評ノ内) 4-1-13-10B1
- 66 文化五年八月四日 (幾久畠)
俳諧之連歌「信濃路や」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来三卷 菊貫五卷 (三十五評ノ内) 4-1-13-10B2
- 67 文化五年八月十日 (幾久畠)
俳諧之連歌「たつ鳥の」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来四卷 菊貫三卷 (五十評ノ内) 4-1-13-10B3
- 68 文化五年八月十五日 (幾久畠)
俳諧之連歌「わたる見ゆ」百韻 升来 (持)
(勝卷) 升来一卷 白日九卷 (十六評ノ内) 4-1-13-10B4

- 69 文化五年九月十五日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「盃に似たる」百韻 升来 (持)
 (勝卷) 升来四卷 白日九卷 (五十五評ノ内) 4-1-13-11B3 (a,b)
- ☆☆70 文化五年九月廿日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「壁越に」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
 (勝卷) 升来〇卷 鶴媛六卷 (二十評ノ内) 4-1-13-11B4
- ☆☆71 文化五年十月五日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「舞鶴も」百韻 升来 (持) 鶴媛 巴人
 (勝卷) 升来一卷 鶴媛三卷 巴人〇卷 白日二卷 (十評ノ内) 4-1-13-12B2
- 72 文化五年十月廿六日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「招く方へ」百韻 升来 (持)
 (勝卷) 升来四卷 菊貫九卷 (七十二評ノ内) 31-3-9-6B3 (a,b)
- 73 文化五年十月廿七日 (幾久畠)
 年籠俳諧之連歌「子宝の」百韻 升来 (持)
 (勝卷) 升来七卷 白日一卷 (七十二評ノ内) 31-3-9-7B1 (1,2)
- 74 文化五年十月廿七日 (幾久畠)
 年籠俳諧之連歌「来る春を」百韻 升来 (持)
 (勝卷) 升来二卷 白日三卷 (七十二評ノ内) 31-3-9-8B1
- ☆☆75 文化五年十一月八日、十二月七日満尾 (幾久畠)
 年籠俳諧之連歌「みとり歴て」百韻 升来 (持) 鶴媛 (持)
 (勝卷) 升来五卷 鶴媛二卷 白日七卷 (二十八評ノ内) 31-3-9-8B3
- 76 文化六年正月十七日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「櫻に」百韻 升来 (持)
 (勝卷) 升来三卷 白日九卷 (五十評ノ内) 31-3-9-7B3
- ☆☆77 文化六年正月廿一日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「折ほと」百韻 升来 鶴媛 (持)
 (勝卷) 升来一卷 鶴媛一卷 菊貫十八卷 (二十八評ノ内) 31-3-9-7
- 78 文化七年十月十四日 (幾久畠)
 俳諧之連歌「難波津や」百韻 升来 (持)
 御勝 (勝卷) 升来六卷 菊貫七卷 (六十二評ノ内) 4-1-16-10 (11) B,BO

真田幸弘公文芸資料一覧表

真田幸弘 真田信安（宝暦2・4 ・25没、39歳）嫡男	菊島 菊の分根	詭遇馴 俳諧引墨高点留	引墨 到来覚	御側御納戸日記	水か、み 菊貫公句稿	東都判者 発句集	東都判者 抜句集	菊貫公年賀集	その他
元文5 (1740) 正・21・生 1歳					『水か、み』 (寛政5成立)				家督相続 恩田木工起用
宝暦2 (1752) 13歳					○				
宝暦7 (1757) 18歳					○				
宝暦13 (1763) 24歳					○				
明和元 (1764) 25歳					○				
明和2 (1765) 26歳					○				
明和3 (1766) 27歳					○				
明和4 (1767) 28歳					○				
明和5 (1768) 29歳					○				
明和6 (1769) 30歳					○				
明和7 (1770) 31歳					○				
明和8 (1771) 32歳					○				
安永元 (1772) 33歳	○25巻				○				
安永2 (1773) 34歳	○16巻				○				
安永3 (1774) 35歳	○32巻	『詭遇馴』			○				
安永4 (1775) 36歳		○正～9月	○95巻		○				
安永5 (1776) 37歳		○7～12月	○94巻		○				
安永6 (1777) 38歳		○11～12月	○46巻		○				
安永7 (1778) 39歳			○47巻		○				
安永8 (1779) 40歳		○8～12月	○82巻					『いにひ杖』	四十賀○
安永9 (1780) 41歳			○81巻						和歌82首
天明元 (1781) 42歳			○75巻						漢詩2首
天明2 (1782) 43歳			○53巻						発句33句
天明3 (1783) 44歳			○24巻						
天明4 (1784) 45歳			○35巻						

表1-1

No.	家	領地	石高	殿席	A	B	事由	時期	備考
1	青木家	撰津麻田	1.0	柳間	○	両	宇和島伊達		
2	青山家	丹波篠山	6.0	雁間	○	両	桑名松平		
3	秋元家	上野館林	6.0	雁間	○	両	彦根井伊・岡崎本多		
4	秋元家	—	0.4	—	○	旗	島原松平		
5	阿部家	備後福山	11.0	帝鑑間	○	両			
6	阿部家	陸奥棚倉	10.0	雁間	○	用	彦根井伊		
7	有馬家	越前丸岡	5.0	帝鑑間	○	両			
8	安部家	武蔵岡部	2.0	菊間縁	○	両			
9	井伊家	近江彦根	25.0	溜間	○	用			
10	井伊家	越後与板	2.0	帝鑑間	○	用	彦根井伊	天明5(1785).12.15	
11	池田家	—	0.3	—	○	—	柳生柳生		
12	石川家	伊勢龜山	6.0	帝鑑間	○	両	府内松平	天保14(1843).3.	御同所之隠居閑山之御甥
13	石谷家	—	0.2	—	○	旗		天保12(1841).12.2	使番
14	板倉家	陸奥福島	10.0	雁間	○	両	小野一柳		
15	板倉家	上野安中	3.0	雁間	—	両			
16	板倉家	備中松山	5.0	雁間	○	用	桑名松平より御頼		
17	稻葉家	安房館山	1.0	菊間縁	○	両	高島諏訪		御一代之御約之由
18	井上家	常陸下妻	1.0	菊間縁	○	両	浜松井上		
19	井上家	遠江浜松	6.0	雁間	○	用			
20	井上家	—	0.5	—	○	旗	浜松井上より御頼		寄合
21	井上家	—	0.1	—	○	旗	浜松井上	天保12(1841).7.16	旗奉行
22	植村家	大和高取	2.5	帝鑑間	○	両	島原松平		
23	大久保家	相模小田原	11.3	帝鑑間	○	両	桑名松平	文政6(1823).9.26	
24	大久保家	下野烏山	3.0	雁間	○	両	島原松平		
25	大久保家	—	0.2	—	○	旗			
26	松平(大河内)家	上野高崎	8.2	雁間	○	両	浜松井上		
27	松平(大河内)家	三河吉田	7.0	雁間	○	両	浜松井上		
28	大關家	下野黒羽	1.8	柳間	○	両	桑名松平		
29	小笠原家	豊前小倉	15.0	帝鑑間	—	両			
30	小笠原家	肥前唐津	6.0	帝鑑間	○	両	桑名松平		
31	岡野家	—	0.3	—	○	旗	浜松井上		
32	岡部家	和泉岸和田	5.3	帝鑑間	○	両	大野土井		御一代切御約之由
33	岡部家	—	0.5	—	○	旗	岸和田岡部		
34	松平(奥平)家	武蔵忍	10.0	溜間※	○	両			
35	松平(奥平)家	上野小幡	2.0	帝鑑間	—	両			
36	奥平家	豊前中津	10.0	帝鑑間	—	両			
37	織田家	出羽天童	2.0	柳間	○	両	浜松井上		
38	加藤家	伊予大洲	6.0	柳間	○	両	桑名松平		
39	加藤家	—	0.2	—	○	旗	下妻井上		
40	京極家	丹後峯山	1.1	菊間縁	○	両	島原松平		
41	九鬼家	撰津三田	3.6	柳間	○	両	林田建部		
42	九鬼家	丹波綾部	2.0	柳間	○	両	林田建部		
43	朽木家	丹波福知山	3.2	雁間	○	用	桑名松平		
44	小出家	丹波園部	2.7	柳間	○	両	彦根井伊		
45	高力家	—	0.3	—	○	旗			
46	小堀家	—	0.5	—	○	旗			
47	齋藤家	—	0.5	—	○	旗			殿様の御養女が奥様
48	齋藤家	—	0.6	—	○	旗			
49	酒井家	播磨姫路	15.0	溜間※	○	両	彦根井伊		
50	酒井家	出羽庄内	17.0	帝鑑間	○	両			
51	酒井家	若狭小浜	10.4	帝鑑間	○	両	桑名松平		
52	酒井家	出羽松山	2.5	帝鑑間	○	両			
53	酒井家	—	0.2	—	○	旗			
54	榊原家	越後高田	15.0	帝鑑間	○	両	彦根井伊		
55	真田家	—	0.1	—	○	旗			
56	真田家	—	0.1	—	○	旗			
57	松平(島津)家	薩摩鹿兒島	72.9	大広間	—	両			
58	諏訪家	信濃高島	3.0	帝鑑間	○	用	桑名松平		
59	仙石家	但馬出石	8.0	柳間	○	両	彦根井伊		
60	相馬家	陸奥中村	6.0	帝鑑間	—	両		嘉永7(1854).6.15	
61	曾我家	—	0.7	—	○	旗			
62	瀧川家	—	0.0	—	○	旗			
63	武田家	—	0.1	—	○	旗	郡山松平		
64	建部家	播磨林田	1.0	柳間	○	老			
65	立花家	筑後柳川	12.0	大広間	○	両	彦根井伊		
66	伊達家	伊予吉田	15.0	柳間	—	両		慶應3(1867).11.11	
67	伊達家	伊予宇和島	10.0	大広間	○	老			
68	津軽家	—	—	—	○	—			津軽意伯、200俵
69	土屋家	常陸土浦	9.5	雁間	○	両	島原松平		
70	妻木家	—	0.3	—	○	旗			
71	土井家	下総古河	8.0	雁間	○	両	彦根井伊		
72	土井家	越前大野	4.0	雁間	○	両	彦根井伊		
73	土井家	三河刈谷	2.3	雁間	○	両	島原松平		
74	土岐家	上野沼田	3.5	帝鑑間	○	用	島原松平		
75	徳川(田安)家	—	10.0	—	○	—			
76	戸澤家	出羽新庄	6.8	帝鑑間	○	両	彦根井伊・郡山柳沢		

表1-2

No.	家	領地	石高	殿席	A	B	事由	時期	備考
77	松平(戸田)家	信濃松本	6.0	帝鑑間	○	両	彦根井伊・林田建部		
78	戸田家	美濃大垣	10.0	帝鑑間	○	両	桑名松平		
79	内藤家	日向延岡	7.0	帝鑑間	○	両	彦根井伊		
80	内藤家	三河拳母	2.0	帝鑑間	○	両	彦根井伊		
81	内藤家	越後村上	5.0	帝鑑間	○	用	桑名松平		
82	中川家	豊後岡	7.0	柳間	○	両	郡山松平		
83	松平(鍋島)家	肥前佐賀	35.7	大広間	○	両	彦根井伊		
84	鍋島家	肥前小城	7.3	柳間	○	両			
85	鍋島家	肥前蓮池	5.2	柳間	○	両	佐賀鍋島		
86	鍋島家	—	0.5	—	○	旗	佐賀鍋島		
87	成瀬家	尾張犬山	3.7	—	○	旗	島原松平		尾張藩附家老
88	南部家	陸奥八戸	2.0	柳間	○	両			
89	花房家	—	0.6	—	○	旗	島原松平		
90	花房家	—	0.5	—	○	旗		天保5(1834).8.21	御一代切御約之由
91	林家	上総請西	1.0	菊間縁	○	両			
92	松平(久松)家	伊予松山	1.0	溜間		両	桑名松平		
93	松平(久松)家	伊予今治	3.5	帝鑑間	○	両	桑名松平		
94	松平(久松)家	下総多胡	1.2	菊間縁	○	両	島原松平		
95	松平(久松)家	伊勢桑名	11.0	溜間※	○	老			
96	一柳家	伊予小松	1.0	柳間	○	両	小野一柳		
97	一柳家	播磨小野	1.0	柳間	○	用			
98	北條家	河内狭山	1.0	柳間	—	両			
99	細川家	肥後熊本	54.0	大広間	—	両			
100	細川韶邦奥方	—	—	—	—	両			(三條実万女・一条忠香養女)
101	堀田家	下野佐野	1.6	帝鑑間	○	両	桑名松平		
102	堀(奥田)家	信濃飯田	1.5	柳間	○	両			
103	堀家	越後村松	3.0	柳間	○	両	桑名松平		
104	本多家	近江膳所	6.0	帝鑑間	○	両			
105	本多家	播磨山崎	1.0	帝鑑間	○	両	岡崎本多		
106	本多家	陸奥泉	2.0	帝鑑間	○	両			
107	本多家	伊勢神戸	1.5	帝鑑間	○	両			
108	本多家	三河岡崎	5.0	帝鑑間	○	用			
109	本多家	—	0.4	—	○	旗			
110	本多家	—	0.5	—	○	旗	林田建部		
111	松平(前田)家	加賀大聖寺	10.0	大広間	○	用			
112	牧野家	越後長岡	7.4	帝鑑間	○	両	桑名松平		
113	牧野家	信濃小諸	1.5	雁間	○	両	岡崎本多		
114	牧野家	常陸笠間	8.0	雁間	○	一	岡崎本多		
115	牧野家	—	0.3	—	○	旗	浜松井上		
116	松平(松井)家	武蔵川越	8.0	帝鑑間	○	両	彦根井伊		
117	松平(越前)家	出雲広瀬	3.0	帝鑑間	○	両			
118	松平(長澤)家	上総大多喜	2.0	雁間	—	両			
119	松平(大給)家	三河西尾	6.0	帝鑑間	○	両			
120	松平(大給)家	豊後府内	2.1	帝鑑間	○	用	桑名松平		
121	松平(尾張)家	美濃高須	3.0	大広間	○	両	高松松平		
122	松平(形原)家	丹波亀山	5.0	帝鑑間	○	用	福知山朽木		
123	松平(紀伊)家	伊予西条	3.0	大広間	○	用			
124	松平(深溝)家	肥前高原	7.0	帝鑑間	○	用			
125	松平(藤井)家	信濃上田	5.3	帝鑑間	○	両	彦根井伊		
126	松平(水戸)家	讃岐高松	12.0	溜間	○	用			
127	松平(水戸)家	陸奥守山	2.0	大広間	○	用	桑名松平		
128	松平家	—	0.3	—	—	旗			
129	松平家	—	0.5	—	○	旗			
130	松平家	—	0.3	—	—	旗			
131	松平家	—	0.2	—	○	旗	浜松井上		
132	松平家	—	0.2	—	○	旗	島原松平		
133	松平家	—	0.1	—	○	旗			
134	松平家	—	0.5	—	○	一			
135	松前家	蝦夷松前	3.0	柳間	○	両	浜松井上		
136	松浦家	肥前平戸	6.2	柳間	○	用			
137	三浦家	美作勝山	2.3	雁間	○	両	岡崎本多		
138	水野家	駿河沼津	5.0	帝鑑間	○	両			
139	三宅家	三河田原	1.2	帝鑑間	○	両	林田建部		
140	森川家	下総生実	1.0	菊間縁	○	両			
141	八木家	—	0.4	—	—	旗			
142	柳生家	大和柳生	1.0	菊間縁	○	用			
143	松平(柳澤)家	大和郡山	15.1	帝鑑間	○	用			
144	柳澤家	越後三日市	1.0	帝鑑間	○	両	郡山松平		
145	柳澤家	越後黒川	1.0	帝鑑間	○	両			
146	山口家	常陸牛久	1.0	菊間縁	○	両	高島諏訪		
147	米倉家	武蔵金沢	1.2	菊間縁	○	両	郡山松平		
148	六角家	—	0.2	—	○	旗	郡山松平		

A:「御両敬帳」(国文学研究資料館所蔵)

B:「御両敬御留守民御名前帳」(真田宝物館所蔵)

勝又洋輝氏作成

菊貫連句の世界

「真田連句を読む会」 小幡 伍

1. 自然と自然の移り変わりの美しさ

4 番	川より暮る 両国の夏	1 2
10 番	芥にも 秋の哀や 佃しま	1 4
139 番	霞から 生る、よふな 塔大工	7 3
160 番	鞠巻ッ さかし出さる、 寺の秋	8 6

2. 天文・時候・地理・季節に関する句

(1) 雨	176 番 寝て見ても 寝て見ても降 梅の雨	9 6
	181 番 おやみなき 雨に葵の 咲出して	9 8
(2) 雪	34 番 厠ながらも 雪の曙	2 4
	64 番 又降雪に 青く成ル松	3 7
(3) 霞	109 番 帰る厂 (かり) 一声宛に 遠霞	6 2
(4) 地理	琵琶湖周辺 2 番 辛崎の 松にこぼる、 比叡の鐘	1 2
	その他、長崎、松嶋、嵯峨、須磨、大原など	
	江戸の中では、佃島、田町、両国、巢鴨、谷中、根岸、吉原など	
(5) 季節	は秋が最も多い。50 番 真崎の 秋や豆腐も 紅葉して	3 2
	夏の涼、春の梅、冬の雪など	

3. 生活・行事の1コマを詠んだ句

(1) 梅見	40 番 梅咲て 畠へ通ッ 煙草盆	2 6
(2) 蓮見	177 番 蓮咲庵に 絶へぬ 献立	9 6
(3) 菊見	187 番 菊咲て 又出る庵の 涼台	10 2
(4) 煤払	38 番 失せもの、 ふしきに出たる 煤拂ひ	2 5
(5) 虫干	100 番 帯ほと道を 明る虫干	5 7
	その他、紅葉狩り、井戸替え、相撲、囲碁、将棋など	

4. 動物と植物

(1) 蛙	20 番 寝かへれハ 寝返る耳へ 鳴く蛙	1 7
(2) 猫	131 番 駈出して 猫のおさゆる 落椿	6 7
(3) 猿	168 番 落栗を 猿にとらる、 峯の寺	9 4
(4) 牡丹	70 番 貧寺も 富貴に見ゆる 甘日草 (はつかぐさ)	4 3

その他、蚊、鶴、鴈、菖蒲、薑、蒲公英、魚は鯉が最も多い。

5. 詠む対象・人間の多様さ

(1) 女性	妻	24番	はすはに見えて	鯉喰妻		2		2
	妻	146番	雲さへ見ると	嘸(かや)をつる妻		7		6
	女房	32番	女房の	こは／＼渡ス	御触状	2		3
	娘	48番	美敷(うつくしく)	瘦る娘の	神まふて	3		2
	その他、内儀、嫁、女、女客、狂女、瞽女、乳母、尼など							
(2) 乞食		12番	乞食は	暖そくに	夜の雪	1		4
(3) 老人		158番	労疾(ろうがい)を	慰め兼ねて	子を預ケ	8		5
		43番	(若といへば	嬉しがる老)				梅
		99番	(老ハ酒	呑とむかしの	咄して)			翠
(4) 博打		154番	博奕(ばくち)の襟へ	落かゝる	蛇	8		4
(5) 泥棒		86番	泥坊の	落して逃る	菊の花	5		2
	その他、僧侶(琵琶法師、虚無僧、鉢たたき、)、身体障害者など							

6. ユーモア溢れる句

		114番	二階から	二階へ借りる	遠眼鏡	6		3
		150番	菖蒲かり	そつとするほど	足に蛭(ひる)	7		8
		185番	女房の	出る日はいつも	雨になり	10		2
		201番	宿替への	車の尻に	鶴の籠(かご)	10		7
		203番	暑き日の	馳走にあらず	瓜島	10		7

106 鬢水(びんみず)に鉄漿(かね)恥かしく移り兒(かお)
 107 又よし原を 寝言にも言
 108 (鋤と鎌とに 百性(ママ)の花)
 109 帰る尸(かり) 一声宛に 遠霞
 110 (ひらひら蝶の 潜る干綱)
 111 遊山温泉(ゆ)に 座頭も拾ふ 名なし貝
 112 (しんなりと 閨師走の 雪柳)
 113 土蔵へ通ふ 煤掃の膳
 114 二階から 二階へ借りる 遠眼鏡
 115 (達磨忌の 客は髭をハ 剃(そら) すとも)
 116 落葉震へハ 本(もと)の乞食(こつじき)
 117 荒々て 夕日まはゆき 旅芝居
 118 (何願ふ 心は鳩の 珠数かけて)
 119 淋しく明る 村の元日
 120 (行衛もしらず ふへる乙鳥(つばくろ))
 121 爪立て 富士に別る、左遷船
 122 (掛行燈に 薫る茶の銘)
 123 後口から 夜の明けて来ル 鉢扣(はちた、き)
 124 愛宕の雲を 浴る洛中
 125 梓弓 立聞人も 貰ひ泣き
 126 (夜の内に ひとつは越し 梓川)
 127 たとりたとり 紀行(みちゆき)をよむ
 128 孤(みなしご)を 馳走に借る 女客
 129 また振り袖に 化する出代(でがわり)
 130 (傘干す背戸に 燃る陽炎)
 131 駈出して 猫のおさゆる 落椿
 132 (供御(くご) 参りする 磯(いそ) か名関)
 133 一人り逃 二人り逃たる 琵琶の曲
 134 (雨もいとわす 勇ム川狩)
 135 支離まで さがし出さる、 堺論
 136 (いつ見ても おもしろそふな 月の影)
 137 踊りを当に こしらゆる帯
 138 (めつたに続く 豊年の春)
 139 霞から 生る、よふな 塔大工
 140 (蛇を夢見て 凄くなる恋)
 141 ある時ハ 乳母にも遣ふ 掛り人(かかりうど)

142 (次第に紙の ふえる紀行)
 143 気違ひに 付て崩る、 市の人
 144 (つゝ近付の ふえる道連)
 145 賽銭を 烏帽子へ拾う 神輿昇(みこしかき)
 146 雲さへ見ると 嘯(かや)をつる妻
 147 (何ぞ書たい 白壁の堂)
 148 狐火の 消へたあたりに 遠碓(とのおきぬた)
 149 (傘も隙なく 降りつ、く雨)
 150 菖蒲かり そつとするほど 足に蛭(ひる)
 151 (手拭かけの 風に吹飛)
 152 怖敷く 昼も蚊を吐く 石燈籠
 153 (吸筒も 爰にたのしむ 郭公)
 154 博奕の襟へ 落か、る蛇
 155 (次第にふえる 如月の蝶)
 156 春の雨 局を巡る 艸草帚(くさざうし)
 157 (利生を照らす 草むらの神)
 158 労瘵(ろうがい)を 慰め兼ねて 子を預ケ
 159 (月迄足して 仕廻(しまう) 井戸替)
 160 鞠壱ツ さかし出さる、 寺の秋
 161 (船呼フ声の 更る冬枯)
 162 寒念仏 我家も雪に ふり替り
 163 (和端へ近く わたる尸金)
 164 垣間見の 廓(くるわ)に覗く 菊島
 165 (座頭の妻に おしき傾情)
 166 行水の 盥に移る 雲の峯
 167 (此頃わたる 馬の三ツ四ツ)
 168 落栗を 猿にとらる、 峯の寺
 169 (霞の中に 薄クする今月)
 170 うか／＼と 蝶の舞込む 涅槃寺
 171 (逢度毎に 聞たかる年)
 172 杜若 長口上に 袖ぬれて
 173 (風のうねりも 萩甘間)
 174 関守の 後(うしろ) 淋敷 鹿の声
 175 (跡につかせる 温泉尻(ゆもどり) の駕)
 176 寝て見ても 寝て見ても 降梅の雨
 177 蓮咲庵に 絶へぬ献立

178 (日長のときに 成りし針箱)
 179 出代りの 袂もひらく 暮の雨
 180 (虫の長サとハ 見ゆる門前)
 181 おやみなき 雨に葵の 咲出して
 182 (追る、よふに 初鯉飛フ)
 183 来るともふ 日の暮か、る 女客
 184 (長ひきせるを 邪魔にして持)
 185 女房の 出る日はいつも 雨になり
 186 (最フ夕月に 好む盃)
 187 菊咲て 又出る庵の 涼台
 188 (闇(くら)く降 明く晴る 雪の星)
 189 冷ひ夜着へ 戻る貫乳
 190 (つと入の 席に姫を 引合セ)
 191 くける側から メ(しめ)て見る帯
 192 (松平 村は行儀も 正敷(ただしく)て)
 193 さはけぬ公事に 支離まで出ル
 194 (堅材木へ 懸る焼灯)
 195 手拭て 居る程掃て 門涼
 196 (金糸の綱も 裾にちよろ／＼)
 197 ちま／＼と 内儀の仕廻ふ 土用干
 198 (膝は少サく 木にむせる猫)
 199 二三枚 隣で拾ふ 星の歌
 200 (暖い簾の裾の そよ秋風)
 201 宿替への 車の尻に 鶴の籠(かご)
 202 (還御あかるき 一家の窓)
 203 暑き日の 馳走にあらず 瓜島
 204 (杣か襦袢を 掛ル寄舟)
 205 舞込んた 雀押る 雪の朝
 206 (馬もなるてふ 若ひ神職)
 207 待合の 柱を登る 蝸牛
 以上 菊貫長句八十一句 短句二十七句 合計一〇八句
 平成十七年度―平成十九年度科学研究費補助金研究報告書
 『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文
 及び諸芸に関する研究』 資料編第二部 喜久の分根
 31・3・21・1 B1 (P.1)―B10 (P.4)中の菊貫の句
 及び、その前句の解説資料(「真田連句を読む会」小幡 伍)

『喜久の分根 辰初秋未秋迄』

(安永三年「1793」四年)より菊貫付句

- 1 (襲着(かさねぎ)しても 寒い黄昏)
- 2 辛崎の 松にこぼる、比叡の鐘
- 3 (幾年も 箔(ママ)代仏に たすけられ)
- 4 川より暮る 両国の夏
- 5 (烟も薄く 登る晴天)
- 6 峯の寺 江湖崩れて 群鳥(むれからす)
- 7 (ひたるい腹で 松嶋に酔ふ)
- 8 日時計も せめてハ 旅の忘草
- 9 (あそこも爰も 露の白玉)
- 10 芥にも 秋の哀や 佃しま
- 11 (犬は尾を振る 主の暮敵)
- 12 乞食は 暖そうに 夜の雪
- 13 (ゑさは子に さ、せて 妻の釣出て)
- 14 拾た文を 懐でよむ
- 15 (末社の屋根ハ 立て居て茸)
- 16 雨に降る 落葉に笠も ほしけ也
- 17 (耳やかましく 鴟(もず)の 囀(さえずり))
- 18 とちから 見ても淋しき 琵琶法師
- 19 (調(偈・げ)を書て置く 大寺の板)
- 20 寝かへれハ 寝返る耳へ 鳴く蛙
- 21 (国分(こくぶ)は 誰も好嫌(すきさらい)なし)
- 22 憎ひほと 女かちなる 涼ふね
- 23 (片側は 太々講の 人の山)
- 24 はすはに見えて 鯉喰妻
- 25 (曲尺の 落して有し 菊の畠)
- 26 賭けにして読ム 山門の額
- 27 (そこら爰らも 麗な頃)
- 28 草履にも 陽炎燃る 汐干潟
- 29 (蚊柱を 倒して通る 蛩うり)
- 30 祭りか延て 馬鹿な六月
- 31 (遊行(ゆぎょう)送ツて 肴喰村)
- 32 女房の こは、渡ス 御触状
- 33 (懐に また見ぬ文の 重たさよ)
- 34 廁ながらも 雪の曙
- 35 (流石若医の 匂わせる夏)
- 36 鬼住と みやは告メぬ 隠し町
- 37 (馬に飼へとて 水捨ぬ寺)
- 38 失せもの、ふしきに出たる 煤拂ひ
- 39 (喰て箱して 鶴の番人)
- 40 梅咲て 畠へ通フ 煙草盆
- 41 (風かと聞ハ 鳥渡ルなり)
- 42 紅葉して 庵に絶へぬ 料理組
- 43 (若といへば 嬉しがる老)
- 44 雨滴の たらいも匂ふ 菖蒲草
- 45 (ひろい書にて 踊唄書)
- 46 惚れてまた 若衆の髪を 結たかり
- 47 (机につもる 初雪の歌)
- 48 美敷(うつくしく) 瘦る娘の 神まふて
- 49 (楼舟にのこる 昼の桂男)
- 50 真崎の 秋や豆腐も 紅葉して
- 51 (鵬(たわむ)れながら 遠ひ井を汲
- 52 手を借りて 来る女房の 手に火のし
- 53 (むら雨に 濡て届きし 記念分(かたみわけ))
- 54 砂糖か破る 長崎の状
- 55 (庄屋の門は 牛と寝て居ル)
- 56 支離ても 世に捨られず 鳴子番
- 57 (傘ともいわぬ むら時雨也)
- 58 茶園みな 踏荒されて 御手料理
- 59 (盃の それで嬉しき 及び腰)
- 60 惚れて驚く 替女の罔両(かげぼし)
- 61 (けふ此頃は 芋も能ころ)
- 62 御使の ひそかに通ふ 下屋敷
- 63 (張箱の 錢をちろりに 添へてやり)
- 64 又降雪に 青く成ル松
- 65 (勢(せい)ひ出せば 縫わる、物よ 恋ころも)
- 66 はたしに成て 帰る妹かり
- 67 (一月邪魔な 閏六月)
- 68 小僧々々(こそこそ)と 呼は猫さへ かげんして
- 69 (世を捨てた気で 三階に住)
- 70 貧寺も 富貴に見ゆる 廿日草(はつかぐさ)
- 71 (恨めしや 頼むスッハ(水破)も 宵の内)
- 72 髪結ふ児(ちご)に 穴の明壁
- 73 (左迂(さすらへ)の 身をいやすふな 年咄シ)
- 74 富士を磁石に 遣ふ舟頭
- 75 (窪ミ々々(くぼみ)も 水暖むなり)
- 76 公家領に しかつへらしく 鳴蛙
- 77 (博奕の留守の 糸のくり言)
- 78 我れに我か 惚れて娘の 縁遠き
- 79 (天文台に 迷フ雲行)
- 80 江戸中か 煤によこれる 十三日
- 81 (仕形てはなしに 唾か御利生)
- 82 碁にあきて 按广(あんま) 覚る 川留り
- 83 (手から手へ取る 毛見の先触)
- 84 一むらも 洪柿ながら 立田姫
- 85 (虫の這うまで 見えわかる月)
- 86 泥坊の 落して逃る 菊の花
- 87 (ひら一面に 残る若柴)
- 88 峯の寺 見て来るやうな 几巾(いかのぼり)
- 89 (鯛と乞食に 飽て立ツ伊勢)
- 90 群ツて 狂女に惚る 土民共
- 91 (碁敵誉(ほめ)る 秋の隠逸(いんいつ))
- 92 風鈴の 歌を抱れて 児(ちご)ハ読
- 93 (側の息子を 撫る迷ひ子)
- 94 後口から 裸にしたる 辻相撲
- 95 (引板やそらすも 風にさかるふ)
- 96 同行と 呼ふ笈摺(おいずり)も 背なの上
- 97 (火縄て吞めハ 烟草侘敷(わびしき)
- 98 爪立(つまだち)て 芦辺見送る 鶴の番
- 99 (老ハ酒 呑とむかしの 咄して)
- 100 帯ほど道を 明る虫干
- 101 (廓を出ても 知つた万歳)
- 102 梅咲て 畠を荒らす 女客
- 103 (女五人て 切ル七夕の竹)
- 104 端たなく 姉のせつきし 放し鳥
- 105 (春を含し 梅の一輪)

